



Title	母親の資源と行動の分析
Author(s)	岩田, 美香
Citation	教育福祉研究, 4, 31-59
Issue Date	1998-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28321
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_P31-59.pdf



母親の資源と行動の分析

はじめに

子どもの数が減り、一方で家電・外食産業・家事代行サービスなどの普及による家事の省力化によって、本来であればゆったりと子育てをできるような社会であるはずなのに、実際には、育児・子育てが難しくなっているといわれている。そこには、子育てコストの上昇や就労している親にとっての就労・保育条件の不備など、育児の実際の困難さと、育児をしている母親の不安や悩みといった意識レベルでの負担感とが存在している。育児不安に代表される育児に対する負担感や嫌悪感については、医学、精神保健学、心理学、社会学などの様々なアプローチからの研究が蓄積されてきているが、育児の困難さとの関連、特に母親がおかれている社会的な階層の視点を組み入れての研究はみられない。しかし、母親のもつ資源や母親のおかれている条件が一様ではなく、その資源の有無や条件が育児行動を規定している現状を考慮するならば、今後は育児における「不安」だけではなく困難をも説明しうる分析枠組みとして、現代社会の特殊性と社会的階層性を考慮する必要がある。⁽¹⁾

ところで、「階層」の視点を組み入れる際には、従来の社会階層区分に用いられるような収入や財産、学歴、職業だけでは不十分であろう。もちろんそれらは、母親が使える資源を規定しているものではあるが、その性質が固定的であるために、一定の階層内の個々の母親の能動的な活動（子育ての実際）は描かれない。母親の具体的な問題解決や危機を乗り越える際に操れる（コーディネートできる）要素となりうる、より流動的・操作的な資源を考慮する必要がある。そこで、Sandra Wallmanの用いる、構造的資源（Structural Resources）と編成的資源（Organizing Resources）という資源システム概念⁽²⁾を応用してみたい。すなわち所得・職業・学歴などの構造的資源（ハー

ド）に加え、時間や情報やネットワークといった生活のソフト面にあたる編成資源を導入してみる。こうした家族の階層性を細かく読み解く必要性は、山田が「再生産」という視点から、階層分析の重要性を述べている⁽³⁾ように、単に家族のおかれた階層によって家族のあり方が変わってくるだけではなく、家族のあり方が家族の階層を決めてしまうという側面もあり、両者は相互に規定し合っているからである。

本論の課題は、こうした2つの次元の「資源」を考慮に入れて、具体的な育児の困難さと意識レベルでの「育児不安」とが、どのような子育ての条件にある母親に、どのように表れるのかを明らかにすることにある。具体的には次の2つの課題を設定する。

1. 母親の社会的階層の違い（構造的資源の違い）によって、母親のもつ育児の資源（編成的資源）とその活用の仕方は、どのように異なるのか。
2. 上記の違い、あるいは同質性が、母親が抱く育児の意識・期待とどのように関連するのか。

以下、第2節においては、階層的にみた母親の資源と生活について、グループごとの特徴を概観し、第3節において特徴的なケースを比較検討する。そして、最後に第4節において全体の考察を進めていく。なお、紙面の制約により、一部の表およびケースを掲載する。

1. 調査概要

(1) 手続きと期間

以下の機関を通して調査協力者に依頼し、調査協力者の自宅・職場・調査協力機関において面接調査を実施した。所要時間は、一人およそ1時間半程度である。

①保育園調査（8名）：

札幌市内の認可保育園において、園を通して依頼書の配布、承諾書の回収を行った。

対象とした母親は、当保育園に入園している

子どもが第1子である3～5歳児をもつ母親である。当園において該当する母親13名に依頼し、そのうち調査承諾者は、8名であった(回収率61.5%)。

調査期間は1997年7月4日～7月19日。

②幼稚園調査(15名)：

札幌市内の私立幼稚園において、園を通して依頼書の配布、承諾書の回収を行った。

対象とした母親は、当幼稚園に入園している子どもが第1子である3～5歳児をもつ母親である。当園において該当する母親は74名であるが、その中からランダムに17名を選択し依頼した。調査承諾者は、15名であり、回収率は88.2%であった。

調査期間は、1997年8月1日～8月30日。

③児童相談所調査(7名)：

札幌市児童相談所の参事である医師の協力を得て、依頼書の配布をしてもらい、後日郵送による回収を行った。21名に配布し、7名を回収した(回収率33.3%)。

調査期間は1997年9月4日～11月28日。

④その他の調査(3名)：

機関を通さず、個人的に調査に協力してくれた3～5歳児をもつ母親であり、その内訳は、筆者の友人、筆者の友人の紹介、前出の相談機関を通して調査に応じてくれた方の友人の計3名である。

調査期間は1997年4月24日～10月23日。

(2) 調査対象

調査対象者33名の特性は以下の通りである。

①家族構成

父母子家族：22世帯、父母子+祖父母家族：8世帯、母子家族：2世帯、母子+祖父母家族：1世帯。

②子どもの数

1人：9家族、2人：19家族、3人：5家族。

③母親の職業

専業主婦：21人(在宅での仕事2人を含む)、パートタイム就業：5人、フルタイム

就業：7人。

④母親の年齢

22歳～43歳で平均年齢は32.4歳。

⑤母親の学歴

中卒：5人、高卒：13人、専門学校卒：4人、短大卒：11人。

(3) 調査内容

①フェイスシート(家族の構成と健康状態、母親の職業の有無、母親の学歴、世帯の年収、夫の職業、居住年数)

②母親の生活(一日の流れと休日の様子、母親のネットワーク)

③子ども・子育てについて(習い事の実際と子どもにかけてよい費用、子どもへの期待、育児不安について)

④母親の問題解決(育児上の困難・不安についての悩みと解決、生活上の困難・不安についての悩みと解決)

⑤母親自身について(自分のための趣味、母親であることの評価)

2. 母親たちの階層的相違

(1) 母親の分類とその特徴

母親の社会的な階層の違いによって、育児を行う上での資源や生活にどのような違いが生じるのであろうか。そうした差異を比べるにあたって、まず最初に母親をいくつかのグループに区分し、その大まかな特徴についてみていく。

調査に協力してくれた33名の母親を専業主婦、パートタイム就業、フルタイム就業に大別し、さらに、それぞれにおいて年収500万円未満層と500万円以上の層とに区分する。その結果、以下の5グループに分類された。なお、保育園を通して依頼したフルタイム就業の母親の職業は、看護婦・団体職員等で占められ、世帯の年収も500万円以上であり、フルタイム就業の母親は1グループのみとなった。また、在宅での事務と下着販売をしている母親2名は、生活パターンがパート勤務よりも専業主婦に近いことから、専業主婦Iグループに含まれている。

【母親の分類】

- S I グループ： 専業主婦 I
(年収 500 万円未満) 11 ケース
- S II グループ： 専業主婦 II
(年収 500 万円以上) 10 ケース
- P I グループ： パートタイム I
(年収 500 万円未満) 3 ケース
- P II グループ： パートタイム II
(年収 500 万円以上) 2 ケース
- F グループ： フルタイム
(年収 500 万円以上) 7 ケース

①専業主婦 I (S I) グループ

家族構成は 11 ケース中 4 ケースが親との同居世帯 (うち 2 世帯は母子+祖父母と父母子+曾祖母) であり、10 代で母親となった 2 ケースも含むことから母親の平均年齢は 29.5 歳と 5 グループ中、最も若い。母親の学歴では、専門学校卒業の 1 ケース以外は高卒と中卒で占められる。夫の職業は運送・建築関係が半数を占める。住居は親との同居 4 ケースを除き、市営住宅・雇用促進住宅を含めた賃貸アパートが 5 ケースと高い。家族の健康⁴⁾では、同居している曾祖母や祖母の病気など、母親も付き添って通院を必要としているケースが 2 ケースみられる。

②専業主婦 II (S II) グループ

家族構成は 10 ケース中 1 ケースだけが親との同居世帯であり、父母子家族が圧倒的に多い。母親の平均年齢は 33.3 歳であり、学歴は高卒と短大卒の割合が 4 人づつと高い。夫の職業は様々であり、職種に傾向性は見られない。住居は親との同居・公宅のそれぞれ 1 ケースずつを除くと、賃貸と持ち家 (持ちマンションを含む) の割合が等しい。家族の健康では、相談機関を通してのケースが 4 ケース含まれるためか、子どもの言葉の遅れを訴えているケースが 5 ケースと高い。しかし、それ以外の健康上の問題や他の家族員の健康上の問題は見られない。

③パートタイム I (P I) グループ

3 ケース中 2 ケースが母子家族であり、いずれも親との同居はみられない。母親の平均年齢は

31.7 歳であり、学歴は短大卒が 2 ケース、中卒が 1 ケースである。母親の職種は損保会社事務・弁当屋・パン屋であり、平均の就労時間は約 7 時間である。1 ケースであるが父母子家族の夫の職業は清掃会社の運転手と夫の実家 (廃品回収業) を手伝っている。住居は、母子寮・市営住宅・借家である。家族の健康では、母親自身の喘息と子どもの頭に水が溜まりやすいために発達上の問題が生じているケースが 1 ケースづつある。

④パートタイム II (P II) グループ

ケース数が 2 ケースと少ないため、このグループでの特徴というよりも 2 ケースの特徴をあげていく。家族構成は同居家族と父母子家族である。また、母親の年齢が高いことは 2 ケースに共通しており、平均年齢は 41.5 歳と 5 グループ中最も高い。母親の職種は両者とも事務であり、平均就労時間は 6 時 45 分間である。夫の職業は土木関係と大工であり、住居は借家と親世帯への同居である。家族の健康では、子どもが障害をもっているケースと祖父が入院しているケースである。

⑤フルタイム (F) グループ

家族構成では 7 ケース中 3 ケースが親との同居世帯であり、残り 4 ケースは父母子家族である。母親の年齢は 33.6 歳と S II グループに近い。母親の職種は、看護婦・保健婦 4 人、団体職員・公務員 3 人であり、夫の職業も団体職員・公務員が多い。母親の平均就労時間は、約 8 時間と全国平均 (1991) の約 7 時間⁶⁾ より長くなっている。住居は同居・持ち家・社宅で占められ、家族の健康では軽いものを除くと、祖母の腰痛と子どもの喘息がそれぞれ 1 ケースである。

次に、こうした特徴をもつ母親たちの編成的資源や生活の違いを、いくつかの側面から検討していく。

(2) 母親をとりまく社会関係

母親たちが社会の中で取り結ぶネットワークでは、どのような違いが見られるのだろうか。すなわち、母親たちはどのような人たちによって支えられているのだろうか。今回の調査では、母親の

もつ親族・友人等のネットワークをたずね、その人が母親からみて心理的にどれだけ近いか・遠いかを母親を中心とした3つの同心円の中に描いてもらった。これは Kahn & Antonicci のコンボイ概念⁽⁶⁾を参考にしたものである。

まず最初に第1円に属するメンバー、これは Kahn らによれば「様々な状況で支えを提供することができる」メンバーである⁽⁶⁾が、その違いを同じ専業主婦どうしの S I グループと S II グループと比べてみると、S I グループが親族だけで占められているケースが多いのに対して、S II グループは子どもを通してできた友人 (Personal な友人⁽⁷⁾) や母親自身の友人 (Maternal な友人⁽⁷⁾)、あるいは近所といった、親族以外のメンバーをあげているケースが多くみられる。また、こうした専業主婦に比べ、働いている母親のネットは、第1円から職場、中でも育児をしながら働いているという同じ立場にある友人が Personal な友人としても Maternal な友人としてもあげられている。一般に、就業している母親は、日中家にいないため、近所でのネットワークは弱くなる傾向にあり⁽⁸⁾、今回のケースでもその傾向はみられるが、職場や保育園を通してのネットが十分に補っている。

第2円についてみれば、多くのケースにおいて、第1子の子どもの年齢が3～5歳という外に向かって動き出す年齢であること、また、調査の手続きが幼稚園や保育園、児童相談所といった機関を通していてもあって、それぞれの機関を核としたネットワークを形成しており、多様なメンバーをあげている。個別に相談に行く児童相談所ルートの母親たちについても、そこでの子どもの療育グループで知り合えた友人が、同様の悩みをもち、お互いに支えあうネットワーク・メンバーとなっていた (#20・#21・#22 ケース)。しかし反対に、今回のようにネットワーク形成の機会が多いであろう母親たちのなかにあっても、親族以外のメンバーがほとんどいないケースが存在していることに注目したい。家族や親族は、多くの母親たちにとって、彼女の様々な悩みの相談相手

として、また、何かの時に子どもを預ける際にも常に重要なメンバーとなっており⁽⁹⁾、家族や親族がいるだけで十分であるかのようにも思える。しかし、母親を支える人たちが家族や親族だけで占められてしまうことの限界は、育児上の問題があっても解決できずにきた母親たちのネットワーク分析⁽¹⁰⁾や母子家族への調査⁽¹¹⁾から示唆されている。

さらに、第3円の特徴をみると、特に S I グループにおいて第3円に属するメンバーをあげている人が4ケースと少なく、ネットワークの広がり比較的小さいという傾向がみられた。

(3) 生活困難と母親の余暇

次節で事例研究によって育児の問題を取り上げるに先だって、ここでは育児を含めた生活全般にわたっての悩みや困難さが、グループごとに、どのように異なるのかをみていく。さらに、母親自身が「母親」としての生活だけではなく、自分自身の時間や趣味をもつことが、母親個人としての充実感を高め、結果として「育児不安」を低めるということが、これまでの諸研究から示唆されている⁽¹²⁾。よって、生活の困難さに規定されながらも、母親たちがどのような「リフレッシュのための時間」を過ごしているのかについても考察していく。

① 育児の悩みと生活の悩み

母親たちに対し、育児上の困難や不安をたずねた後に、現在あるいはこれまでの生活上の困難や不安をたずねたところ、表1のような回答が得られた⁽¹³⁾。最初に、育児の悩みについてみると、P I グループでは育児の悩みが表面化しにくい、F グループでは仕事との両立に悩んでいるという傾向がみられる。しかし他には、グループごとの差異はみられず、どのグループの母親も子ども関連の悩みをあげていた。

しかし生活の悩みではグループごとに特徴がみられた。S I グループの生活困難を順にみていくと、まず#9 ケースは、子どもが産まれたときが家中で大変だったと答えている。このケースは、母子家族となった経緯をほとんど語ってはくれない

表1 母親の悩み

	ケースNo	育児の悩み	生活の悩み
S Iグループ	#9	子が言うことを聞かない、叱り方がわからない	昔) 子が生まれたとき
	#2	子どもがわからず、ずっと不安だった	曾祖母との生活が大変
	#3	子が言うことを聞かない	
	#11	昔) 子が人見知り、現) 体力的にしんどい	昔) 夫が転職でキリキリ
	#1	昔) 子が言うこと聞かない	昔) 夫と性格不一致
	#4	子が祖母にべったり、自分は育児してない	親世帯と別居したい
	#5	昔) 1人目の時、夜中の授乳・離乳食づくり大変	
	#6	下の子がかまって、かまって……	将来の教育費が心配
	#7	昔) 下の子生まれて、上が赤ちゃん返り	夫の帰りが遅い
	#8	昔) 上の子生まれてマタニティーブルーに	夫の帰宅遅い
#24	出産時マタニティーブルー、Ch.1が言葉の遅れ	昔) 自分の母親の精神病発病と育児が重なり大変、現) 夫の転職希望	
S IIグループ	#13	昔) 扁桃腺で入院、川崎病かと心配	
	#14	昔も現も) 言語の心配、見相では大丈夫と言われたが……	若い母親との調和を気にする
	#21	2児ともに言葉が遅かったため、Ch.1の3歳過ぎには育児不安と困難が一緒に	
	#22	Ch.2とCh.3が1歳違いなので大変だった、Ch.3の心配はプレイに通って吹っ切れた	
	#25	Ch.1が小さく生まれ、喘息で入退院、尿道で手術、言葉の遅れと不安だらけ	託児所、ベビーシッターに預けることが不安で嫌
	#10	昔) 母子カプセル状態で、心配性だった	昔) 夫転職まで生活大変
	#23	Ch.1は足、Ch.2は言葉が心配だった、Ch.1とCh.2の育児重なり体力的に大変	昔) 夫の帰宅遅く、自分も友人少なかった、マンションでの人間関係
	#16	昔) ウンチがおむつにしかできなかった	
	#18	第1子については常に心配あり、自分の子育てこれでいいか	
#12	昔) おむつがとれなかった、母乳3時間おき	昔) 夫の仕事が1年契約なので、契約更新時	
P Iグループ	#17	生活が成り立ったうえで、子どもの様子が見えての悩み	離婚して生活のめどが立たないとき、気持ちが子へ行かない
	#15	あまりない、強いてあげればCh.1が反抗的	昨年離婚、お金が不安
	#19	Ch.1の発達が全て遅く、姑からの圧力もあり、辛かった	夫の借金の返済が月に10万近くあり、経済的に大変
P IIグループ	#20	Ch.1よりCh.2が手がかかった、Ch.3はハンデをもった子がどのように育つか不安	
	#32	昔) 昨年1月からアトピー、今はよくなる	
Fグループ	#27	昔) 子が登園拒否、仕事辞めようか	
	#30	昔) 離乳食も時間をかけてつくる→子待てず泣く	
	#26	昔) 保育園で泣かれて仕事の両立に悩んだ	家事が苦手、夫が非協力的
	#28	昔) 生後1年間専業主婦でイライラ	昔) 子が生まれる前、自分が仕事人間で夫イライラ
	#31	Ch.1が情緒不安定、爪をかじるなど	昔) Ch.1が生まれたとき仕事との両立が大変だった
	#33	Ch.1は生まれてからずっと心配、性格的なこと	仕事の上で忙しい
	#29	仕事と子どもの病気のやりくり	自分の仕事が4月から転勤となり、大変

かったが、「自分の親世帯と同居している年数」と「子どもの年齢」とが同じであることからしても、子どもが産まれたときの大変さが親世帯との同居になっていることが伺える。# 2 ケースは、現在、曾祖母（母親自身からみて祖母）との同居生活に自由さがなくことの悩みをもっている。また、# 1・# 7・# 8・# 11 ケースは、過去にあるいは現在において、夫の仕事や性格での悩みを回答している。# 4 ケースは、改めて第3節において検討するケースであるが、親世帯との同居のために自分たちの家族としてのアイデンティティももたず、自らの子どもに対しても愛情がわからないという問題を抱えている。# 24 ケースでは、最初の子どもが産まれたときに実母の精神病が発病し、実父も別れて家を出て、この母親が育児と自分の両親の双方を訪ねるといった心労と疲労とが重なっていた。現在は、夫が転職と田舎への転居を希望しているが、田舎へ行くと子どもの相談機関も少なくなるため（第1子の言葉の遅れが気になり児童相談所を訪ねている）心配している。

同じ専業主婦の生活の悩みをS IIグループについてみるとどうであろうか。S Iグループに比べ、生活の悩みとして回答する母親は少ない。しかも、その内容をみていくと、# 14・# 25 ケースは「育児不安」とも重なる内容が生活不安として述べられている。すなわち、# 14 ケースは、幼稚園内で自分が比較的高齢であるため、他の若い母親たちから非難を受けないように服装などで目立たないように苦労していることをあげており、# 25 ケースは託児所やベビーシッターに預けることが不安で嫌であることから、育児を含めた生活全般が大変だったと回答している。また一方で少数ではあるが、# 10・# 12・# 23 ケースのように夫や生活に規定されて問題が生じているケースも存在している。# 10 ケースが、夫が現在の仕事に転職するまでは収入も少なく生活全般が大変だったこと、# 23 ケースが以前に夫の帰宅が遅かったことに加えて、引っ越してきたマンション内での人間関係に悩まされたこと、そして# 12 は夫の仕事が1年ごとに契約更新するため、その時期になると

家庭の雰囲気が緊張するとのことである。

次に、就業している母親について、グループでの相違をP IグループとFグループとからみていく。P Iグループでは、いずれも金銭的な問題をはじめとした生活基盤の問題を抱えていた。すなわち、# 17 ケースが離婚したときに、住居も仕事も含めて全く生活のめどが立たず、どうしていいかわからずに困っていたこと、# 15 ケースが昨年離婚してからギリギリの生活で、お金のないことの不安を述べている。また# 19 ケースは父母子家族であるが、夫の借金の返済が月に10万円近くあり、生活が苦しいと述べている。P Iグループは、そのうちの2人が純母子家族であることから、「母親がパート就労で世帯の年収が相対的に低い」グループの傾向性であるというよりも、「低所得にある母子家族」の傾向性とみることもできる。実際、母子家族の就労は不安定なパート就労が多く、年収も低いという現実がある⁽¹⁴⁾。しかしここでは、「母親がパート就労で世帯年収が低所得」という軸で斬ってみたときに、母子家族の生活の困難性と重複する側面があるのと同時に、父母子家族にあっても、同様の困難性を抱えているということを押さえておきたい。

これに対してFグループでの問題の特徴は、# 29・# 33 ケースが母親自身の仕事上での大変さをあげ、# 26・# 27・# 28・# 31 ケースが「育児の悩み」での回答も含めて、育児と仕事との両立に悩んでいた。

このようにS IグループとS IIグループ、P IグループとFグループとを比較してみると、S IIグループの一部を除き、社会的な階層に関係なく母親自身の仕事も含めた生活問題に母親の困難性が規定されているといえる。しかしその内容をみていくと、Fグループでは、女性の社会進出と関わった生活の悩みであるのに対して、S IやP Iグループは生活の基盤に関わった悩みを抱えている。

②母親の余暇

先に概観した生活問題をはじめ、母親が抱える様々なストレスを緩和してくれるのが母親自身の

趣味をはじめとした余暇の時間である。今回、母親たちが仕事や家事や育児以外の時間をどのように過ごしているのかを一日の流れのなかでたずねていったところ、家で家事や育児の合間を使って、テレビや新聞を見たり読書をするといった「在宅での余暇」と、習いものをしたり友人と連れだって外出するといった「積極的余暇」とに大別できた。

そうした余暇の内容をみていくと、在宅での余暇に関しては、就労している母親も専業主婦の母親も大差はみられない。テレビ・新聞・読書をはじめとして、手紙などの書き物や針仕事をあげている。しかし、積極的余暇に関しては、グループによって差がみられた。専業主婦であるSⅠ・SⅡグループは、ともに積極的余暇をあげてはいるものの、SⅠグループでは習いものや育児サークルに参加している母親は2ケースだけで、他は近所の公園やマーケットへ主に親族（自分の姉とその子ども）と一緒に出かけている。これに対しSⅡグループでは、語学・アートフラワー・料理教室といった習いものをしている母親や、友人とのお茶や昼食を外食で楽しんでいる母親がみられる。

働いている母親は、日中を職場で過ごしているため、積極的余暇をする時間が専業主婦に比べて少なく、その回答もPⅠグループでの親業講座に行っている1ケース、PⅡグループでの気功をしている1ケース、Fグループでのアウトドア・乗馬クラブ、バトミントンをしている2ケースである。就業している母親の場合、積極的余暇をもたないといっても「仕事」という場を通して社会との接点ももてるため、SⅠグループが積極的余暇をもてないこととは性質が異なる。さらに、「社会性」だけに限らず、母親の「生き甲斐」として「仕事」を捉えた場合、パート就労の母親とフルタイム就労の母親とでは、自ずと仕事に対する意味合いも異なってくるであろう。

(4) 育児行動と母親の意識

本項では、育児行動の一つとして、子どもの習い事の実際と、その行動に影響を与えているであろう母親の育児に関する意識について考察する。

親が子どもに対して様々な期待を抱くのは、ある意味で当然のことであり、しかも現代のように情報と子ども関連の産業が氾濫している中において、期待だけに終わらず、その期待を行動へと移す親も多いのであろう。ここでは、その行動の一つとしての子どもの習い事を取り上げる。それは、家庭の収入という構造的な資源に規定されつつも、教育的効果を期待して子どもにお金をかけているという事実から、家族資源の中での（母）親の選択がみられるものの一つであると考えられるからである。

現在、就学前の子どもに対して、習い事をさせているケースを拾っていくと、SⅠグループでは11人中3人、SⅡグループが10人中7人、PⅠグループが3人中1人、PⅡグループが0人、そして全ての子どもが保育園へ行っているFグループの子どもでも7人中3人が、幼稚園・保育園以外に何らかの習い事をしている。ここでは、特に専業主婦のグループ間において差がみられた。SⅠグループに比べ、SⅡグループでの習い事をさせているケースは圧倒的に多く、しかも、複数の習い事をしているという特徴がみられた。しかしこれが、「今後（小学校入学時ぐらいまで）、子どもの習い事として、いくらまでかけてもよいか」をたずねていくと、Fグループにおいて高額化の傾向がみられるものの、全般に、どのグループにおいても5千円～1万円という回答が多かった。

こうした習い事の実際は、母親たちの意識をどのように反映しているのであろうか。今回の調査では、選択肢の質問形式による親の発達期待と、自由回答による親の期待とをたずねてみた。

就学前教育としてどのような領域を重視するかについて、主要5領域（言語・自立・認知・表現・社会）の中から2つずつの項目を提示して、より重要な方を選択してもらった結果が表2に示すとおりである⁽¹⁵⁾。数値は、各項目につき、4回の一対比較判断を求めた場合の「より重要」として選択した回数の平均である。したがって数値が大きいほど、その項目を重視している（何度も選択した）ことを示している。

質問した10項目を次に示す。カッコ内は領域を示す。

1. 正しい言葉話すこと (言語)
2. 人に頼らずに色々なことを自分でする習慣 (自立)
3. 文字 (ひらがな) をよむこと (認知)
4. のびのびと絵をかいいたり、ものをつくったりすること (表現)
5. おもちゃを友達といっしょに使うこと (社会)
6. 子どもの歌を歌うこと (表現)
7. ものおせずに新しいことをすること (自立)
8. ものごとを人と一緒にしたり、かわりばんこにすること (社会)
9. 新しいことばの意味をおぼえること (言語)
10. 数を数えること (認知)

表2 子どもについて重視する領域

	言語	自立	認知	表現	社会
全体平均	2.8	4.9	1.5	4.2	6.5
S I 平均	2.1	5	1	5.2	6.6
S II 平均	3.9	4.4	2.2	2.9	6.6
P I 平均	3	5	0.3	5	6.7
P II 平均	6	4.5	2	3	4.5
F 平均	1.6	5.4	1.9	4.4	6.7

全体を通して「社会」と「自立」の領域が5～6ポイントとより重視され、反対に「認知」の領域が1～2ポイントと軽視されている（相対的に重要ではない）という結果がでており、グループによる大きな特徴はみられない。強いて差異をあげれば、S IグループとP Iグループにおいて、「表現」が平均より高く重視され、「認知」が平均よりもやや軽視されている傾向がみられる。これらの発達期待がストレートに子どもの習い事という行動に表れているとすれば、特にS IIグループでの「認知」や「言語」の領域が、より重視されても良さそうなものである。

同様に「子どもへの期待」を自由回答から拾っていくと、多くが「優しく」・「他者との協調性」・「健康」で占められ、その他に「子ども自身が何か打ち込めるものを見つけてほしい」という期待と希望が述べられ、これに関してもグループごとの差はみられない。また、先ほどの習い事との関連で言えば、プールに代表されるスポーツの習い事が、母親の「健康になってほしい」の反映であると言えるのかもしれないが、他は行動面に反映していない。

これらの結果は、何を意味しているのであろうか。まず第一に、「親の期待」として回答されている内容とは乖離して、習い事の実際が進行しているということである。これは、自由回答において母親が期待する「優しく」・「他者との協調性」・「健康」という内容が、簡単に習い事によって獲得できるものではない性質のものであるためともいえるが、「母親の期待」は幼稚園・保育園で獲得してもらい、小学校入学のための準備などを念頭に置いた、より現実的な目標（字が書ける、数が数えられる、英語が話せる）などは習い事で獲得してもらいたいという、母親の使い分けが成された結果ともみれる。実際、英語などは、4名が習わせていたが、うち3名までが「数年後に導入される小学校での英語教育」を理由にあげていた。

また、現在の習い事の実際では、年収などに応じて階層的な差が生じていたが、今後の「子どもにかかる教育費」では、グループ間での差がみられない。別の縦断調査をした結果⁽¹⁶⁾からも、就学前の習い事が、小学校入学へ向けて一気に実現していくという傾向がみられ、ここで回答してくれた「今後、子どもにかけてよい教育費」は、実際に実現していく可能性が高い。その際、年収の差が最大で5倍ほどあるなかにあって、同様に、子ども一人あたり月に、5,000円～10,000円の費用を捻出していくことは、所得が低い方の家計にとっては大変な負担となる。その大変さを後押ししているのが、母親たちの「期待」に表れていた等質性であろう。「期待」の回答には表れてこない「現実的な期待」も、階層差を越えて母親たちに存

表3 誰が教えるべきか

	Q 1	Q 2	Q 3	Q 4	Q 5	Q 6	Q 7	Q 8	Q 9	Q 10	Q 1～Q10での平均
全体平均	2.4	2.6	2.8	3.4	3.2	3.6	3.0	3.0	3.0	3.0	3.00
S I 平均	2.5	2.5	2.7	3.6	3.4	3.9	3.2	3.1	3.3	3.2	3.14
S II 平均	2.2	2.5	2.7	2.9	2.6	3.3	2.8	2.5	2.9	2.9	2.73
P I 平均	2.3	3	2.7	4.0	4.0	3.7	2.7	3.7	2.7	3.0	3.18
P II 平均	3	2.5	4	3.5	4	4	3	4	2.5	3.5	3.40
F 平均	2.6	2.6	2.9	3.3	3.3	3.6	3.0	3.1	2.9	2.9	3.02

在し、その社会的な「標準」を半ば強制的に実現していかなければならないという、外側から創り出される困難さが存在していると考えられる。

さらにここで、注目しておきたいことは、母親たちが育児や教育の機能を商業的なものに委ねているにも関わらず、母親の責任は、一向に軽くなってはいないということである。先の幼児期の教育の10項目（「正しい言葉話すこと」～「数を数えること」）について、それぞれの項目は、誰が子どもに教えるべきか、その教育の責任についてたずねた結果が、表3である。数値は、「全て母親が」を1点とし、「全て先生が」を6点として、1点～6点の6段階で評定してもらった平均である。従って、得点が低いほど、母親の責任認識が高いことを示している。どの項目も、2点「大体は母親が」～3点「どちらかといえば母親が」が多くなっており、習い事として外部に委託しているものがみられた「Q3：文字を読むこと」や「Q10：数を数えること」といった項目でさえ、母親の責任認識は高い。グループでの階層的な相違をみると、最も習い事を多くさせていた、SIIグループでの母親の平均得点が、2.73と他のどのグループよりも、母親の責任を大きく認識していた。

3. 母親の育児行動にみる資源の活用

前節では、母親たちの社会的な位置によって、自分たちの操れる資源が一定部分、規定されていること、また、そこでの困難性にも、階層的な傾向性があることを確認した。さらに、それらの困難性は、個々の家族がもつ困難さに加えて、意識レベルで捉える「育児の標準」に向かって、強制的に実現していくことから創り出されていく可能

性があることも示唆した。

本節では、個々の家族の資源に制約があるなかで、母親の主体的な側面に注目し、母親が資源をどのように活用し、その結果、解決できる問題と、それでも残されてしまう問題とが何であるのかをケースを検討していくことで明らかにしていく。

(1) 専業主婦の育児不安と育児困難

1) 資源に制約のある母親

専業主婦のなかでもS Iグループは、生活上の悩みを答えている母親が多いにもかかわらず、その悩みを解決するために母親が活用できる資源は、制限されていた。親戚以外の社会的なネットワークも少なく、年取も限られているなかには、「育児」を母親以外の人やサービスに外注することにも制限があり、精神的にも肉体的にも母親一人が担う部分が多くなっていく。しかも、その疲労を回復するための自分の余暇にも制限があり、本来は生理的活動である「寝ること」を、自分のための趣味・余暇の項目としてあげている母親もみられた。

ここでは、S Iグループのなかでも、資源をコーディネートして育児を乗り越えている母親2ケースと、家族の問題に対して母親が対処できずにいる2ケースを取り上げて考察する。

① コーディネート・ケース

最初に、生活が困難な状況の中で、母親が育児資源をコーディネートしている2ケースのプロフィールを述べる。

— # 11 ケース —

家族構成は、夫37歳、本人31歳、Ch.1(男児)5歳、Ch.2(女児)3歳、Ch.3(男児)1歳の5人である。家族の健康状態は良好である

が、Ch.1の発音がやや不明瞭であることを母親が少し心配している。

夫は、印刷関係の仕事で、年収は200～300万円未満の範囲にある。住居は、賃貸のアパートで市内から越してきて8ヶ月になる。母親の学歴は、働いていたため通信教育で高校卒業の資格を取る。

- ・ネットワーク：第1円～子ども、夫、両親、親友(Maternal)、幼稚園の先生。
第2円～友人(学生時代)。
第3円～幼稚園のお母さんたち、近所。
- ・生活の悩み：Ch.1が生まれた頃、夫が転職し、夫も精神的にキリキリしていたため、それが母親へあたり、母親も子どもへとあたってしまったことがあった。
- ・育児の悩み：Ch.1が、小さい頃人見知りで、不安だった。
現在は、肉体的・体力的にしんどい。3人目を産んでから、母親自身が寝込むこともある。

— # 24 ケース —

家族構成は、夫31歳、本人30歳、Ch.1(男児)3歳、Ch.2(女児)1歳の4人である。家族の健康状態は夫がアレルギー神経症腸炎、Ch.1は言葉が遅く保健所や児童相談所へ相談し、週に一度「ことばの教室」へ行っている。母親自身とCh.2は良好である。

夫は、現在、建設関係の仕事をしているが、田舎で第一次産業をしたいと転職を希望している。現在の年収は300～500万円未満の範囲にある。住居は、市営住宅に住んで5年になる。母親の学歴は、高校卒業である。

- ・ネットワーク：第1円～子ども、夫、妹、自分の父親。
第2円～近所(団地内)、友人(育児サークル)、義父母、弟。

第3円～遠い親戚、自分の母親。

- ・生活の悩み：自分の母親が精神病を患っているが、それがCh.1の出産前後に発病し、父親も母親と別居、病院へのお見舞いと週に一度の実家の父の様子を見に行くという生活で、マタニティ・ブルーになった。現在は、落ち着いている。
今の悩みは、夫の転職希望で生活のめどが立たないこと。
- ・育児の悩み：Ch.1が1歳6ヶ月頃から、言葉が遅かった。
生活の悩みと重なって、子どもに言葉の遅れがあるが、田舎へ行くと、子どものための機関も少ないため心配である。

【一日の流れ】

これらの母親の一日の流れをみると、時間を有効に活用している様子うかがえる。洗濯機を回しながら朝食の用意をしたりというような時間の並行活用や、# 11 ケースは昼食の後かたづけと同時に夕食を用意してしまうことで、また# 24 ケースは夕食後の後かたづけを次の日の朝にもってくることで、忙しいなかにも子どもと遊ぶ時間や家族との団らんの時間を積極的に創り出している。

両者の母親とも、積極的余暇を楽しめる余裕はないが、夜、子どもたちが寝てからの「在宅での余暇」を楽しみに一日をやりくりしている。しかし、それらも# 11 ケースでは夜10時から、# 24 ケースでは、夜中の12時から起き出して楽しむ「余暇」であり、その時間はせいぜい1～2時間程度であり、全国的な平均よりは少ない⁽¹⁷⁾。これらの母親にとって、自分のための時間を長くするためには、睡眠時間を削ってしか捻出できないという生活の制限がある。

【問題の解決】

次に、それぞれのケースの生活や育児の問題に

ついて、どのように解決を図ってきたかをみていく。最初に# 11 ケースについて生活の悩みをみると、子どもが産まれるまでは夫婦で美容師をしていたが、子どもが産まれて母親が仕事を辞め、夫は印刷関係の仕事に転職した。このことは夫自身にとってもストレスの高いものであったと思われる。そうしたストレスを母親が受け止めることとなるが、母親自身は、その悩みを学生時代の友人の所へ遊びに行ったり、そこで話をすることで解消していた。育児の悩みについても、かつて、Ch.1 の人見知りはかなり強く、幼稚園でも友達の輪のなかに入って行けないことが契機になって、子どもも母親自身も「この先どうなるか」と「育児不安」になったという。その時は、図書館で何冊か本を借りてきて読んだが、結局、母親自身が楽になったのは、実家の母親や幼稚園の園長先生や担任の先生に相談することを通してであった。この母親は、そうした経験が影響してか、ネットワークが広く、第1円に幼稚園の先生や子育てを通しての Maternal な友人が入れられ、第2円、第3円にも広く友人が分布している。現在の住居に引っ越してきて1年未満であるが、第3円に近所でのネットワークも形成されている。母親が考える「育児不安」についてたずねても、子どもと二人きりであることが原因であり、育児しているときの親の不安が「育児不安」であると回答している。

こうしたネットワークをもつ母親であっても、現在の育児の問題である肉体的・体力的な大変さは解消されていない。育児の大変さと「育児不安」は異なるものであると母親が回答するように、子どもを3人もつようになって、子どもはみんなそれぞれ違うということや、枠にはめようとするこの無意味さはわかったが、日々の生活の困難は増大し、3人目を産んでからは母親自身が寝込むこともあるという。この世帯にとって、お金がかかるのは食費であると答えているように、母親の育児を省力化するための外食の利用やクリーニングの利用など商業的なサービスを買って時間をつくり出すことは難しい。休日の過ごし方にしても、どこかへ出かけると大きな出費となるため、実用

をかねた1週間分の買い出しや、近所の公園、または道内の実家へ遊びに行くことでレジャーとしている。この世帯の年収は税込みで200~300万円未満であるが、反対に、この世帯の生活保護基準額から年収を算出すると2,795,780円となる⁽¹⁸⁾。回答しやすさの配慮から、年収は金額に幅を持たせて記号で選んでもらう形式にしたため、この世帯が回答の上限に近いのか下限に近いのかは判断できないが、# 11 ケースには税込みの年収で回答してもらっていること、また先ほどの基準額が回答の幅の上限に位置していることから、この世帯が生活保護基準と同等か、それ以下の年収でやりくりしていると思われる。

24 ケースの場合は、どうであろうか。このケースの生活の悩みは、母親の精神病の発病とCh.1の出産が重なり、子どもが2ヶ月の頃に母親は入院、父親も母親と別れて家を出ることから、小さい子どもを抱えて母親の病院へのお見舞いや父親の訪問などを、母親の妹と分担をしてやっていたが、それでも疲労から母乳もでなくなってしまった。姑も心配して来てくれていたが、姑に頼ったことがないので、かえって気を使ってしまったという。結局、時間とともに、それぞれの生活が表面上落ち着いて、現在に至っている。この家族が住んでいる団地の目の前に認可保育園があり、母親もそこを利用したかったが「母親が働いていないとダメ」といわれて利用できなかった。反対に、Ch.2が生まれる前後の2ヶ月は、条件に合って預けることができた。とても近いし、お金の面でも助かったと話していた。

育児の悩みについては、子どもが1歳6ヶ月頃から、子どもとの言葉が通じないことにおかしいなと気づいたが、その時は、2人目もいたので電話で保健所に相談した。当時は、子どもを通して知り合った友人に話して「そんなものだね」と言ってごまかしていたり、赤ちゃん用品の卸業者が配布している育児情報誌や地域の育児情報誌を読んでいた。子ども自身の言葉の問題は、まだ残っており、ことばの教室へも通っているが、母親自身の悩みは、現在入っている2つの育児サークルで

緩和されている。これらのサークルは、一つが母親が新聞広告で独自に見つけだしてきたサークルであり、もう一つは「仲良し子ども館」に代わってできた「あそびのひろば」⁽¹⁹⁾を通してできた自主サークルである。先ほどの保育園にしても、この度新しくなった「あそびのひろば」にしても、この母親の行政への不満は高い。「あそびのひろば」の新しいプログラムでは、1年間継続ではなく1年を4期に分けて、その1期間にしか参加できないという短期間のものなので、子どもも親もプログラムに慣れる前に、他のお母さんたちと仲良くなる前に終了してしまう。それでも、自分たちでサークルをつくり、市の保母が出張で遊びの指導をしてくれることになっていたが、実際に連絡をしても「保母が忙しくていけない」と断られてばかりで、結局、母親をとりもってくれるプロのアドバイスは受けられなかったそうである。この母親も、育児サークルと団地での Maternal な友人とを中心にして、育児のネットワークは充実しており、その中で育児を楽しんでいる。母親に、一日のなかでの楽しい時間をあげてもらおうと、夜中の自分のための時間とともに、子どもとのやりとりや、子どもと一緒に遊ぶ時間をあげている。

こうした、母親のやりくりのなかで育児のネットワークをひろげ、何の問題もなく楽しい育児をしている母親でも、現在抱えている生活上の不安は解消できない。夫の田舎への転職希望が、児童相談所の相談を訪れるきっかけとなっているように、生活のめどが立たないという不安とともに、子どもの言葉のための適切な機関が、転居先でも保障されるかどうかの不安がある。これまでの行政への不満も重なって、先取りした心配となってしまう。また、将来、祖母の病状が悪化した時には、再び、母親自身の育児も巻き込んだ生活が逼迫してしまうというリスクを背負っている。彼女にとっての「育児不安」は、自分が自分の母親から子育てを覚えてもらった経験がないという不安が常に心の底にあること、と答えている(彼女が3人兄弟の弟と妹の面倒をみてきた)。これらは、充実した育児サークルをもっても解決・

解消されない領域であろう。

②コーディネートできていないケース

今度の2ケースは、資源の制約もあり、母親のコーディネートも十分に発揮できずにいるケースである。先のケースと同様に、2ケースのプロフィールからみていく。

— #4ケース —

家族構成は、夫22歳、本人22歳、Ch.1(男児)3歳、Ch.2(男児)7ヶ月、母方の祖父45歳、祖母44歳の6人である。家族の健康状態は、祖母が腎臓透析を受けており、週に3回、母親本人が送り迎えをしている。他の家族員は良好である。

夫は、建築関係の仕事であるが、母方の祖父の仕事を手伝っている。2人とも18歳で結婚して以来、仕事・住居ともに全面的に母方の両親を頼っている。年収は300~500万円未満の範囲にあるが、祖父母に出してもらっている部分が多い。母親の学歴は、中学卒業である。

・ネットワーク：第1円~Ch.2。

第2円~両親、夫、Ch.1。

第3円~なし。

・生活の悩み：結婚と妊娠が同時であったため、その時の生活をどうするかで大変だった。

今は、生活では落ち着いたが、自分たち(夫と自分の子ども)の家族という実感がなく、親と別居しようか迷っている。

・育児の悩み：Ch.1が、祖父母ばかりで自分にはなつかない。Ch.2は可愛いですが、Ch.1は、このままだと自分の子どもという気がしない。

— #9ケース —

家族構成は、本人26歳、Ch.1(女児)5歳、母方の祖父57歳、祖母53歳の4人である。家族の健康状態は、良好である。

本人は専業主婦をしており、祖父の生計で家族4人が生活している。年収は200万円未満の

範囲にある。母親の学歴は、中学卒業である。

- ・ネットワーク：第1円～両親、姉、友人（学生時代）。
第2円～なし。
第3円～なし。
- ・生活の悩み：Ch.1が生まれた当時が大変だったと回答してる。(それ以上は、話しながらない。)
- ・育児の悩み：Ch.1が小さいときは、おむつやミルクで悩んでいた。
現在は、子どもへの叱り方がわからない。

【一日の流れ】

これらの母親の一日の流れは、どちらも両親と同居している影響もあってか、先のコーディネートケースに比べると、一日の流れのなかで受けもつ育児・家事の分担が少ないことがみられる。単に時間的に少ないだけならば、就労して祖母と同居している場合のケースなどにもみられるであろうが、母親たちが子どもの「母親」としての生活よりも、祖父母にとっての「娘」としての生活を送っている様子がうかがえる。

それでも#4ケースは、祖母が週に3度病院へ行く日には母親が家事を受けもち、Ch.2についての養育は母親がリードして行っていることから、彼女なりに担っている領域がある。Ch.1についても、朝食を食べさせようとしたり、犬の散歩を子どもと連れだって行くなど、子どもとの距離を小さくしていこうと試みてはいるが、Ch.1の方が一向に母親になつかず、甘やかしてくれる祖母の方へと行ってしまふ。昨年のゴールデン・ウィークも家族で連れ立って外出したが、Ch.1が祖母と一緒にでないことから泣いてしまって、母親にとっても楽しい時間は過ごせなかったという。それ以来、最近では家族（夫と母親と子ども）だけで出かけようとは思わないと話している。今の母親にとっての気晴らしは、家にいることが好きではないので、みんなで買い物に行くことぐらいで、生活の中の積極的な楽しみは見いだせないでいる。

#9ケースは、回答全体を通して、あまり話したがない母親であったので、得られた情報が少ないという制約はあるが、一日の生活のなかで空欄となる箇所について「どのように過ごすことが多いのか」を再度たずねても、母親自身があまり思い出せず、強いていえば「テレビを見たり、本を読んでいたり」という回答で、漫然と一日を過ごしている。この母親にとって、一日のなかで楽しい時間とイライラする時とをたずねると、楽しいのは子どもが幼稚園へ行っている間に買い物へ行く時で、反対にCh.1が帰宅後は、騒がしくて嫌と答えている。

【問題の解決】

問題の解決については、どうであろうか。#4ケースにとっての生活の悩みは、育児の悩みにも表れているように、親世帯への生活の依存とそこから派生する育児実感の無さである。一日の流れのなかでみたように、この母親も子どもへ接近するためのアプローチは試みているが、子どもからの拒否と祖母の孫への溺愛とで、うまく機能していない。母親が思う「育児不安」をたずねても、「育児したいしていないから……不安も何もない」という回答であった。けれど、「児童虐待」についての感想をたずねると、「(子どもに)言っても聞かないときなどは、(虐待する親の)気持ちは分かる。カッときたら……何でこんなにしてあげてるのに……と思う」と答えている。「育児不安」は無くとも、児童虐待をしてしまう母親の気持ちには共鳴する部分もあり、(この母親が児童虐待に結びつくという意味ではなくとも)一般に言われている「育児不安」を無くすることが児童虐待を防げる、という考え方は、やはり一部分の母親に対する説明にしかない。この母親に対して、周囲の人々はどのように対応しているのだろうか。まず、母親のネットワークをみていくと、母親の両親と夫・子どもだけのメンバーであり、他の友人・知人は円内に記入するほどではないと言う。彼女にとっての友人は、中学時代の友人が主で、この地域や現在の幼稚園を通しての友人はみられない。今回の被調査者のなかにも、#4ケースと

同様に10代で母親となっているケースもみられ、そのケースは#4ケースとの親近感ももっているが、#4ケースにとっては、一定の距離を置いて付き合いたいと話している。また、最も身近にいる祖父母の対応は、結婚の時から親に依存して生活してきているという経緯もあり、娘世帯が独立して（家を出て）自分たちの世帯を築くのは無理と反対している。母親自身は、それでも独立してやってみたいと思う反面、祖母の健康状態の心配もあって、親たちが寂しさからも独立に反対するのであろうという気持ちを汲むと、喧嘩してまで出る気にはならない。間に立っている夫は、母親の意向に従うと言っており、反対もしない代わりに責任感も弱い。その結果、現状の生活を過ごすこととなり、母親が育児をしようにも、Ch.1が泣いてわがままを言い、祖父母がそれに従うという悪循環が生じている。

#9ケースの場合も、生活の悩みと育児の悩み（問題）が重なって生じているように思われる。母親自身が訴える悩みとしては、ポツリポツリと過去の悩みについて、子どもが生まれたときに生活全般に大変だったことと、子どもが小さいときのおむつやミルクの仕方などで悩んだことを話してくれた。こうした問題は、祖母が手伝ってくれることで、後は姉に聞くことで解決してきたという。第1子ということで保健婦の訪問もあり、育児書や育児雑誌も読んだが、有効なサポーターとはならなかったらしい。この母親は、前節のグループ分類の箇所でも述べたように、子どもの出生と同時に親世帯との同居をはじめており、育児も生活も親がかりでしか成立しなかったであろう事情があったと思われる。そのためか、このケースも#4ケースと同様に、母親のネットワークは小さく、学生時代の友人以外は地域でも幼稚園でもネットワークが広がっていない。

現在の悩みをたずねても、母親からは「特にない」と回答していた。プロフィールのところに載せてある現在の育児の悩みは、「育児不安」をたずねていくなかで、子どもが言うことを聞かず、祖父母は何でも「いいよ」と対応してしまうので、

子どもにとっては善し悪しが分からず、その結果、叱るのが自分だけとなり、叱り方がわからないという話が出てきていた。一日の流れのなかでは、母親が育児自体を放棄しているかのようにも見受けられるが、休日には、子どもも連れて買い物へ行くといった行動もみられる。母親自身、何が問題かを認識できずに日々を過ごしてしまっているように見受けられる。今後の生活の予定をたずねると、子どもが小学校2・3年生くらいになったら、パートに出たいと話していた。

これら2つのケースに共通してみられることは、母親としての生活の基盤が成立していないために、どちらも育児を主体的にすることはなく、その結果、育児の楽しみも悩みも認識されていないことがあげられる。また、両ケースともに、それを気づかせてくれたり、解決するための励ましをくれるようなネットワークも形成されていないことから、問題が顕在化しないまま放置されてしまっている。家族や親族のネットワークの重要性和限界とが、両ケースともにみられた。

2) 資源の多い母親

これまでみてきたS Iグループに比べ、S IIグループは、同じ専業母親でも母親がコーディネーターできる育児の資源は多く、母親の外にある制約が比較的小さいケースが多い。実際、S IIグループでは、S Iグループの#4・#9ケースのようなコーディネーターでさえにいない母親の存在はみられなかった。S IIグループの10ケース全てが、程度の差こそはあれ、比較的恵まれた育児資源の中から、家族の状況や母親自身にあった資源を取捨選択し、育児環境を整えていた。しかし、その中であっても、育児のストレスを感じずに自分の生活を楽しんでいる母親と、「育児不安」を常に高く感じている母親とが存在した。ここでは、その対照的な母親を2ケースづつ取り上げて、両者を分けている要因は何であるのかを考察していく。

① 充実ケース

#16ケース

家族構成は、夫39歳、本人34歳、Ch.1（育児）4歳の3人である。家族の健康状態は、全

員良好である。

夫は、団体職員で、年収は700～1000万円未満の範囲にある。住居は、社宅に住んで4年になる。

以前は、札幌市以外の道内の社宅に住んでいた。母親の学歴は、短大卒業である。

- ・ネットワーク：第1円～夫、子ども、自分の両親、妹、夫の親、もとの職場の友人。
第2円～なし。
第3円～社宅内の友人・知人、自分の習い事での友人。
- ・生活の悩み：特になし。
- ・育児の悩み：2歳半～3歳半にかけて、ウンチがおむつにしかできなかった。

23 ケース

家族構成は、夫36歳、本人31歳、Ch.1(女児)4歳、Ch.2(男児)3歳の4人である。家族の健康状態は、Ch.1が生まれたときに足の外ハシがひどくて、1年間通院した。Ch.2は2歳の頃から言葉の遅れが気になっており、保健所やことばの指導、児童相談所へ相談に行った。ことばについては、Ch.1も遅い方だった。夫と本人は良好である。

夫は、製薬関係の仕事で、年収は700～1000万円未満の範囲にある。住居は持ちマンションで、市内より越してきて3年になる。母親の学歴は、専門学校卒業である。

- ・ネットワーク：第1円～夫、友人(マタニティ・スイミング)。
第2円～自分の母、近所のお母さん、教会のお母さん、幼稚園の先生。
第3円～同じマンションの友人(Maternal)、弟のお嫁さん、夫の母。
- ・生活の悩み：精神的に辛かったのは、マンションに引っ越してきたばかり

の頃の人間関係。

- ・育児の悩み：Ch.1が生まれたときの足の問題。体力的にはCh.2が生まれたばかりの頃。

【一日の流れ】

16と# 23ケースの一日の流れをみると、両ケースともに、自分のための余暇や学習の時間が積極的に組み入れられている。また、そうした時間を創り出すために、時間を効率的に使っている様子もうかがえる。# 16ケースでは、子どもが幼稚園へ行く前に一気に家事を片づけ、昼食時には夕食の用意も同時にしてしまうといった効率の良さから、午前中の子どもが幼稚園へ行っている時間と子どもの就寝後を自分のための時間として、4～5時間確保している。このケースは、夜中の夫の軽食も含めて、夕食の準備の回数が多いにも関わらず、これだけの時間が確保できている。同様に# 23ケースも、子どもが幼稚園へ行く前の朝の時間と、昼食後の家事を効率的にこなしており、また、朝から夜を通して、隙間の時間を惜しんで自分の英語学習の時間として使っている。どちらも、自分の時間をきちんと確保しつつも、子どもと外遊びに出かけたり、おやつを作ったり、絵本を読んだり、子どもとの生活も大切にしている。

【問題の解決】

これらのケースは、どのように育児や生活の問題を乗り越えてきたのであろうか。# 16ケースからみていくと、この母親にとっての育児の悩みは、子どもが2歳半～3歳半の時期に、オムツはとれていたがウンチだけはオムツでしかできない、というものであった。この時は、医師や専門職の友人に相談し、「時間をかけてみていこう」「子どもが、トイレのことを意識しすぎないように……」といったアドバイスを受け、便を柔らかくする薬も処方してもらった。それに加え、母親も繊維食を中心にした食事を作ることによって、子どもがウンチをするときの痛みが取れて、自信が付き、自然とトイレでできるようになったという。その他には、これまでも現在も、大きな育児の悩みは

なく、淡々と育児をこなしている。この母親のコーディネートの特徴として、情報の収集力のよさがあり、しかもそれらの情報に振り回されずに、自分で取捨選択できていることがあげられる。それは、当時義務化が外され、任意となった子どもの予防接種についても、幼稚園選択についてもみられた。この母親が、これまで「育児不安」を比較的感じる事がなく来られたのは、「子どもと部屋で2人で向きあっているよりも」という考えから、3歳児保育で現在の幼稚園に入園させた要因が大きいのかもしれない。こうした幼稚園の入園時期に関しても、事前に友人や情報誌からの情報を集め、彼女の判断を下している。彼女のネットワークは、心理的にごく近くのネットと、やや距離を置いてのネットとの、2つのカテゴリーにネットワークが分けられているのが特徴である。近所に住む自分の両親と、市内に住む親族、および元の職場の友人が、ごく親しい第1円としてあげられ、第2円には該当者はいないが、第3円に、地域や自分の習い事を通して広がった多くの友人があげられている。

また、生活の悩みを聞いてみても、結婚してこれまで、生活の困難さに直面したことはないという。このケースの夫の場合、仕事のために家にいる時間も短く、夫の協力も得にくいことから、専業主婦としての不満についてもたずねてみた。その結果、家にいるだけでも、幼稚園のPTAや町内会の役員やボランティアなどで外へ出る機会が多く、自分が専業主婦として「家に閉じこもっている」という感じもしない。働いているよりは家にいなければならないのかもしれないけれど、その分、自分で時間を好きに使えるという自由さがある。夫に関しても、仕事から協力は難しいが、その分金銭的にも育児にも家事にも、完璧を要求せずにうるさくないので、不満はない。また社会的には、長年働いてきた経験から、女性が仕事と育児を同時にこなすことの大変さと、中途半端にすることで周囲の迷惑も知っているので、そんなに無理して働くよりも今の生活を大切にしようと思っている。これが、特別な資格を持っていると

か、お金に困っているとかであれば、話は違うと思うけれど……と話していた。

#23ケースの母親にとって育児の悩みは、Ch.1の生まれた頃から外反足である。Ch.1が1歳ぐらいの時に、装具をつけようかという話もあったが、親戚の看護婦をしている人を通して専門の医師に相談し、「装具はいらない」ということになった。当時は、よく転び、歯や顎にケガをしやすいかった。母親は自分の注意でケガを防げると思って、常に注意をされていて疲れたという。この当時、夫や自分の母親をはじめ、マタニティ・スイミングで知り合った友人が看護婦ということもあって、よく相談していたという。#23ケースの母親のネットワークをみると、現在でもこのマタニティ・スイミングの友人は第1円に属しており、重要なサポーターとなっている。この母親も#16ケースと同様に、自分のネットワークのメンバーを活用して相談をし、情報を得ることで問題を解決している。生活の悩みとも重なって、精神的に辛かったことは、現在のマンションに引っ越してきた時の人間関係であった。最初、#23ケースの母親は、子どもを預け合ったりできるような、同じマンション内での育児を介したネットワークを広げようと、他の母親たちに話しかけをしたり、子どもたちを家へ呼んだり働きかけるが、周囲の親たちにとっては、表面的な付き合い以上のものを望んではいなかった。次第に#23ケースは、マンションの外へとネットワークを広げていくことになる。当時は、この母親が外にネットワークを広げていくことで、マンション内での悪口に悩まされたこともあったが、現在はマンションを越えた「近所」でのネットワークが支えとなって、気にならなくなったという。ネットワークのメンバーを見ても、マンション内では一人だけが第3円に属しており、他の「近所のお母さん」たちの方が第2円と、母親により近い存在となっている。面接調査に行った日にも、「近所の」子どもを、相手のお母さんが上の子を病院へ連れて行っているため、預かってみていた。#23の母親のもう一つの育児の大変さは、Ch.2が生まれたばかりの肉体

的に育児が辛かった時期であったが、ただ話し合えるだけのネットワークではなく、現在のような「近所で」・「気軽に」預けあえるようなネットワークがあれば、その当時の大変さも軽減できていたのかもしれない。

②「育児不安」ケース

— # 14 ケース —

家族構成は、夫 47 歳、本人 41 歳、Ch.1 (男児) 5 歳の 3 人である。家族の健康状態は、Ch.1 の発達に、特にことばが遅いのが気になって、病院の医師や保健所、児童相談所へ相談に行った。夫と本人は、良好である。

夫は、運送関係の仕事で、年収は 500～700 万円未満の範囲にある。住居は借家で、市内より引っ越してきて 4 年になる。母親の学歴は、高校卒業である。

- ・ネットワーク：第 1 円～夫、姉、自分の母、夫の母、親友(母親学級)、友人(学生時代、元職場)。
第 2 円～幼稚園の先生方、児童相談所の先生。
第 3 円～幼稚園でのお母さん。
- ・生活の悩み：特になし。他の若い母親との調和を気にする。
- ・育児の悩み：子どもの発達の遅れが、大丈夫といわれているが、毎日不安。

— # 18 ケース —

家族構成は、夫 38 歳、本人 32 歳、Ch.1 (女児) 8 歳、Ch.2 (女児) 6 歳、Ch.3 (男児) 5 歳、夫方の祖父 64 歳、祖母 62 歳の 7 人である。家族の健康状態は、全員良好である。

夫は、勤務医で、年収は 700～1000 万円未満の範囲にある。住居は、夫の親と同居して 9 年になるが、途中道内を転勤した時期もある。母親の学歴は、短大卒業である。

- ・ネットワーク：第 1 円～夫、子ども、自分の両親、近隣の友人 (Maternal)。

第 2 円～夫の親、友人 (学生時代)。

第 3 円～夫の友人 (家族ぐるみの付き合い)。

- ・生活の悩み：特になし。
- ・育児の悩み：Ch.1 については、子どもが 3 人産まれても、心配が生じる。

【一日の流れ】

一日の流れをみると、これらのケースも先の # 16 ケースや # 23 ケースと同様に一日を忙しく過ごしているが、「子ども」中心で一日が流れていることが特徴としてあげられる。# 14 ケースでは、子どもが幼稚園へ行っている間に、親しい友人との会話やランチを楽しんだりといった、自分のために費やす時間もみられるが、日常の子どもの身支度や食事などに母親がかかる時間がかかなり多い。母親自身、高齢になってやっとできた子どもであり、一人っ子ということもあって、ついつい目がいってしまうという。子どもと一緒に時間を多く過ごすことが、母親の喜びや楽しみであると同時に、次の「問題の解決」にみるように、母親の「育児不安」をも生じさせている。# 18 ケースは、子どもが 3 人いる忙しさに加えて、3 人ともに習い事が多い。小学生である Ch.1 は週に 5 日、幼稚園へ行っている Ch.2 と Ch.3 は週に 3 日が習い事に費やされている。その結果、母親の生活も下の 2 人の子どもを中心に、習い事へ連れていくことが、生活パターンの中心となっている。

【問題の解決】

14 ケース・# 18 ケースともに、生活の悩みは特にみられない。# 14 ケースが述べている「他の母親との関係」にしても、幼稚園内で自分が高齢であるため、他の若い母親からの非難を受けないように、服装や言動を目立たなく・無難に、と気を使っているというものであり、生活の悩みというよりも育児での社会関係の悩みと言える。結婚して、かなり経ってからの子どもということもあり、生活もお金の面でも安定している。母親自身が「これだけ生活が安定していて、本当はゆっ

たり子育てができるはずなのに……」と話しているように、生活の基盤は安定していても、この母親にとっての「育児不安」は高い。このケースの場合、子どもが一人であるために、つつい母親の目が子どもにいつてしまうという状況に加えて、子どもの発達の遅れの心配が重なって、不安を高めている。子どもが1歳前後の頃から、友人の子どもと比較し、わが子のことばが出ていないことや歩かないことが心配になったという。早速、病院の医師や保健所に相談したが、経過観察となり、それでも不安が残り、児童相談所で発達検査を受け「心配ありません」と言われている。しかし現在でも、母親は「子育ては難しいし、やっぱり毎日が不安」と話している。# 14 ケースのネットワークは、第1円の Personal・Maternal な友人をはじめ、第2円の児童相談所や幼稚園での専門家、そして第3円に地域の幼稚園でのネットワークと幅広く構成されている。これまでの子どもの発達上の悩みや育児の難しさも、母親一人で抱え込むことなく、夫をはじめ、ネットワークのメンバーや専門家に相談してきたが、母親にとっては一時しのぎの解消でしかなく、また次の不安が生じてくるという。ネットワークの中では、Personal な友人であり、子育てを終えている先輩お母さんのアドバイスが一番の解消になっていた。現在の同じ立場にある Maternal な友人は、話は合うけれども、子ども同士の比較にもなってしまうからである。母親自身、自分の「育児不安」を認識しており、「自分自身が考える育児不安」についてたずねると、子どもの悩みではなく母親の悩みであると答える。子どもが生まれたときには、「元気で育ってくれれば」という願いだけだったが、だんだんと欲も出てきて幼稚園や他の子どもとも比較してしまい、「人並み」を期待してしまう。自分では、肩に力を入れているつもりもないし、過剰な期待もしていないつもりなのだけれど、成長も発育も発達も標準のレベルがそろっていると、安心できるという気持ちが根底にある。でも、この気持ちは、どんなお母さんにもあると思うし、反対に「育児不安」がない母親はいないと思う、

と回答している。

一方、# 18 ケースにとっては、「育児不安」が、どのようなものとして捉えられているのであろうか。母親は、「育児の大変さとは別に生じるもの」であり、「マスコミでみる親子のモデルが、我が家と違うことに不安を感じ」、また「子どもがどんな子どもに育つのか、自分のしつけに対して不安」になるという。そしてそれは「家で子どもとだけ向き合っていると（育児不安が）生じると思う」と話している。

実際に# 18 ケースの母親は、Ch.2・Ch.3 が生まれることにより、体力的には年子ということもあって大変であったが、精神的には、Ch.2・Ch.3 に対しては「こんなものかな」と思えるようになったという。しかし、Ch.1 に対しては「こんなもの」とは思えず、Ch.1 の発達段階に応じて生じてくる悩みが、そのまま、母親の不安となっている。Ch.1 が小学校に上がっている現在では、近所に同年齢の友達が少ないという心配が母親を悩ませているが、子どもにとっては異年齢ではあっても親しい友人が近所におり、母親の悩みが子どもの悩みと一致しているとは限らない。この母親のネットワークも、配偶者や同居の親をはじめ、Maternal な近隣の友人や Personal な学生時代の友人、そして家族ぐるみの友人と、多様性をもっており、Ch.3 が生まれた時には、夫の転勤時で義父母との同居もしていなかったことから、保育所も利用している。しかし、そうした母親のもっている育児資源が「育児不安」の軽減へと結びついてかないのは、コーディネートが子ども中心にされすぎている、「子どものため」に母親がコーディネートしすぎているためであると考えられる。このことは、# 14 ケースにも同様にみられる。先の充実ケースである# 16・# 23 ケースと比べても、両者ともに、情報量、ネットワーク、時間について遜色はなかった。しかし、その活用の方向性が、「自分」と「子ども」の両者を捉えているのと、より「子ども」だけを捉えているのとで、分けられてしまっている。

(2) 働く母親の育児不安と育児困難

次に、就労している母親についてみていく。就労形態として、フルタイム就労とパートタイム就労とで働いている母親が存在したが、フルタイムの平均就労時間が8時間30分、パートタイムで7時間と、両者で大きな開きはみられなかった。よってここでは、フルタイム就労とパートタイム就労の区別よりも、育児資源の多少によって、就労している母親にどのような差異が生じているのかを考察する。

1) 資源に制約がある母親

今回、就労している母親の中で、構造的な資源に制約のあるケースは、P1グループ（パートタイム就労で年収が500万円未満）の3ケースのみが相当した。

— # 17 ケース —

家族構成は、本人34歳、Ch.1（男児）6歳、Ch.2（男児）4歳の3人である。家族の健康状態は、本人に喘息があるが、子どもたちは2人とも良好である。

本人の仕事は、損保会社の事務をパート勤務で行っている。年収は200万円未満の範囲にある。住居は、市内から母子寮に住んで1年半になる。母親の学歴は、短大卒業である。

- ・ネットワーク：第1円～子ども、親友（学生時代）、年上の知人（Maternal）、自分の母親。
第2円～親族、友人（Personal、Maternal）、友人（母子仲間）、寮の先生、寮の友人。
第3円～会社での知人。
- ・生活の悩み：離婚時の生活の立て方。将来へ向けてフルタイムの仕事と寮からの自立。
- ・育児の悩み：生活が成り立って、余裕が出てくると、子どものことが見えてきて心配も増える。

— # 15 ケース —

家族構成は、本人27歳、Ch.1（男児）6歳、

Ch.2（男児）3歳の3人である。家族の健康状態は、全員良好である。

本人の仕事は、お弁当屋さんでパート勤務をしている。年収は200万円未満の範囲にある。住居は、市営住宅に住んで5年半になる。母親の学歴は、高校中退である。

- ・ネットワーク：第1円～自分の両親、妹、親友（Personal）。
第2円～近所（Maternal）、幼稚園のお母さん。
第3円～なし。
- ・生活の悩み：昨年離婚し、お金の不安。
- ・育児の悩み：あまりない。

— # 19 ケース —

家族構成は、夫36歳、本人34歳、Ch.1（男児）5歳、Ch.2（男児）3歳の4人である。家族の健康状態は、Ch.1が脳に水が溜まりやすいため認識が弱く、児童相談所や小児センターも受診している。Ch.1、Ch.2ともに気管支が弱く、かぜをひきやすい。夫と本人は、良好である。

夫は、清掃会社の運転手と実家の家業（廃品回収業）を手伝う。本人の仕事はパン屋でパート勤務をしている。年収は300～500万円未満の範囲にある。住居は、市内から借家に住んで約11ヶ月になる。母親の学歴は、短大卒業である。

- ・ネットワーク：第1円～子ども、保育園の父母、保育園の保母。
第2円～近隣の友人（Maternal）、妹、実母。
第3円～夫、職場の知人。
- ・生活の悩み：結婚して以来、ずっと生活が大変。夫の借金も月に10万円。姑の問題。
- ・育児の悩み：Ch.1の発達が全般的に遅れていたこと。

【一日の流れ】

これら3ケースの一日の流れをみると、#17

ケースで6時間、#15で5時間30分、#19ケースで9時間が仕事に追われており、その残りの時間で家事と育児を切り盛りしている。働いている母親にとっての慌ただしい時間は、自分の出勤前の時間と、帰宅後の子どもを寝かせるまでの時間である。#17・#15ケースは、夕方の忙しさを少しでも緩和するために、朝のうちに夕食の用意をしているのがみられる。また、そうした母親を支えているのが、#17ケースと#19ケースでは保育園・学童保育であり、#15ケースでは幼稚園と、その保育時間の短い分を補うための祖父母である。

#19ケースが他の2ケースに比べて家事の時間が少ないのは、母親の就労時間が9時間とかなり長いことに加えて、後の問題解決の所で触れるように、現在、保育園の先生たちと協力して、子どもの療育を中心にした生活をはじめたばかりであるためと思われる。

母親たちの余暇の時間をみても、日々「積極的余暇」を楽しめるケースはなく、3ケースともに、子どもたちが寝てからの「在宅での余暇」を過ごしている。そんな中でも、#17ケースは、隔週で「親業講座」に参加して、自己啓発を含めた子どもとの対応を学習しており、#19ケースは、保育園の父母会の活動が、母親にとってもリフレッシュできる時間であるという。さらに#19ケースでは、夫との関係が悪いこともあって、「本当にたまに、夜中に子どもも夫も寝入ってから抜け出して、保育園のお母さんたちとカラオケに行くことがある(夫に話すと反対するので……)」と話しており、夫に話して出かけるときも「保育園での作業のため」と説明して、息抜きをしている。

【問題の解決】

これらの3ケースに共通している特徴として、生活上の悩みが、日々の生計に関わった問題をあげていることにある。

#17ケースは数年前に離婚をして札幌へ来たが、現在の母子寮に落ち着くまでは、仕事も住居も含めた生活全般のめどが立たず、毎日が精一杯であったという。とにかく、「母子」となってゼロ

からスタートするに際しての情報が全くなく、母子寮の存在や、「母子連」といった横のつながりとなる団体の存在を教えてくれたのは、人伝で知り合えた先輩の母親からであった。その後、区役所などの公的なところへ相談へ行ったが、そこでは対応してくれた「人しだい」という感じで、いい人にあたれば「ラッキー」だし、悪い人にあたれば「最悪」だという。彼女の場合、A区役所では「何しに来たの?」という対応であったが、B区役所では対応が良く、現在の母子寮へ入所するに至っている。育児の悩みについても、生活が落ち着くまでは、子どもへと目が行かず、「育児不安」どころではなかったという。離婚当時は、子どももCh.1が3～4歳でCh.2が1～2歳と可愛い盛りであったのに、今振り返ると、当時の子どもの写真が(保育園などから渡されるものを除いて)全くない。今、生活が落ち着いて余裕も出てきて、はじめて、子どものことについても色々と考えられるようになった。現在の育児の悩みは、子どもとどう向き合っていくかという自分の悩みと、一人で何もかも決定していかなければならないことの不安がある。先に触れた「母親の余暇」でもある「親業講座」への参加は、こうした不安や悩みの解決のためにも役立っているであろう。それが、他のケースの所でみられたように、子どもに対する学習の機会やサービスを購入することによってではなく、母親自身の学習参加によって問題解決を見だし、そこでのネットワークも広げていこうという所に、この母親の独自性がみられる。母親のネットワークをみていくと、学生時代の親友や年上の知人などPersonalな友人が第1円に属しており、第2円に母子家族同士の友人やMaternal・Personalな友人に加えて、寮でのスタッフや寮での友人と様々なメンバーが属している。この母親は札幌の出身ではなく、母子家族となって新しい地域でスタートしたこともあり、ネットの形成は難しかったと思われるが、本人が意識して母子家族のネットを核にしてネットワークを広げてきている。こうして広げてきているネットワークの中でも、一番の支えとなってくれ

ているのは、具体的なアドバイスもくれる年輩の女性であるという。母親自身が揺らいでいるときに、同年齢の友人では、同情はしてくれるが、先を見越した情報や支えとはなりにくい。Ch.1が小学校へ上がった今では、成績についても、周囲から「どうするの?」と追いつめられて、不安になることもある。

現在の生活上の悩みは、やはり、将来へ向かっての金銭的な問題にある。現在の母子寮での生活は、一応、安定しており、寮内の保育所などに助けられる部分も多い。しかし、子どもの年齢が上がってくるにつれて、門限など、ここでの生活の不自由さが出てくることもあるので、Ch.2が小学校へ上がったなら、フルタイムで働いて寮を出て生活したいと考えている。市営住宅の2種では、郊外にしか入れるところはなく、民間のアパートの敷金・礼金の準備を考えると、生活は、まだまだ大変である。

次に、# 15 ケースについてみていくと、生活の悩みでは、昨年離婚したばかりということもあって、「お金が不安」となっている。母親自身が落ち込んだときに、話を聞いてもらったり支えてもらったりしているのは、ネットワークの第1円に属している Personal な友人である。この母親のネットワークが、先の# 17 ケースに比べると、ネットワークの広がり小さい、意識的に拡張していないようにみえるのは、両親が近所に住んでおり、多くのサポートがそこで成されているためであると思われる。しかし反対に、既存のネットワークを大切にしている様子うかがえる。このケースの場合、離婚後に夫が家を出て行き、母子はもとの住居に残った。離婚後、母親が就職する際に、「保育所」への変更ではなく「幼稚園」を継続させることにしたのも、近所での、幼稚園でのネットワークを断ち切りたくないという考えからである。育児の悩みについては、「特にない」と答えていたが、話の中で「上の子が反抗的である」ことを述べていた。母親の思う原因としては、子どもは遊びたいが自分は仕事でかまっていられず、結局、兄弟ゲンカとなると兄の方を我慢させ

ているので、欲求不満が溜まっているのかと考え、生活と育児の天秤に、どうしたらいいのかと困っている。

最後の# 19 ケースについては、どうであろうか。このケースは結婚して7年になるが、ずっと生活が大変だったという。夫は、経済観念もなく酒乱気味であり、育児にも非協力的で親離れもできておらず、何度も離婚しようと思った。そのことを姑は知っているが、夫を叱るでもなく甘やかしておいて、嫁であるこの母親への対応はきつかった。Ch.1の発達の遅れにしても、母親のせいであると、夫からも姑からも言われてきた。一昨年の春に、夫が大きな借金をしていることがわかり、現在の母親自身のパート代金は、月に10万円近い返済へと、全て消えていく状態である。母親が「経済的に大変なことは、生活の全てに影響する。精神的にも影響する。」と話しているように、育児の悩みも生活の大変さに規定されて、母親一人で背負っている。

母親がCh.1の発達の遅れに気づいたのは、3歳ぐらいの時である。物事の認識が悪く、最初は、耳が悪いのかと思っていたが、その後、夫との家庭内でのいざこざもあり、放置したままで時間が過ぎていった。後に、母親が働きに出ることになり、現在の保育園を利用することとなった。保育園で、保母にCh.1のことを相談するのがきっかけとなり、保母の方からの専門的にみてもらった方がいいというアドバイスを受けて、小児センターを受診した。Ch.1の認識の悪さは、脳に小さな傷があるためと水がたまっているためであるという説明を受けたが、手術はリスクも伴うため、当分は保育園と家庭とでの環境を変えていくことでの経過観察となった。母親は、この診断を聞いて、内心ホッとした部分があったという。それまでは、家庭環境も悪かったので、子どもの障害が自分の責任ばかりと思っていたところもあるが、先天的な要因もあると言われて、「自分のせい」だけではないことが分かったからである。夫に対しても、Ch.1の障害のことについては、「話して話して、やっと理解してもらった」が、それでも「そ

んな子を産んだのはおまえのせいだ」と言われている。母親が「それはそれで私が悪かったから、今後の子どもの家庭環境のために協力してほしい……」と話をしているが、どこまで協力してくれるかは不確定である。姑も、保育園と母親が積み上げてきたものを壊すように非協力的である（例えば、ひどい虫歯のため、甘いものを制限しているが、姑は好きなだけジュースを与える）。現在の子どもへの刺激としては、働きかけを多くしたり、身体を使って遊ぶことの大切さを言われており、母親は、保育園の保母とCh.1の状態を理解してくれている保育園の父母たちと協力して、子どもへの療育に取り組んでいる。母親のネットワークをみても、夫よりも親族よりも、保育園での父母や保母が第1円に属している。母親の会話の中に、何度も「この保育園で良かった」・「保育園の父母や保母とのやりとりの中で色々学んだ」と出てきたように、自分の子どもを保育園の職員や他の父母と一緒に育てているという実感が、この母親の精神面でも、行動面でも強みとなっている。

2) 資源の多い母親

就労している母親のうち、世帯の年収が500万円以上であるケースは、PⅡグループの2ケースとFグループの7ケース、計9ケースが相当する。これらの母親は、いずれも、仕事と家事、母親と個人としての生活を忙しく両立させていた。ここでは、核家族のケースと親世帯との同居ケースとを1例づつあげる。

— # 26 ケース —

家族構成は、夫37歳、本人36歳、Ch.1(男児)4歳の3人である。家族の健康状態は、全員良好である。

夫・本人ともに、公務員で、年収は700～1000万円未満の範囲にある。住居は、公務員宿舎に住んで4年になる。母親の学歴は、短大卒業である。

- ・ネットワーク：第1円～夫、子ども、自分の両親、妹、友人(保育園と職場が重なる)。

第2円～夫の母親、保母、親友(学生時代)。

第3円～近所。

- ・生活の悩み：夫の協力が得られない。
- ・育児の悩み：保育園に預けたときに泣かれて、仕事との両立に悩んだ。

— # 30 ケース —

家族構成は、夫32歳、本人34歳、Ch.1(女児)3歳、母方の祖父71歳、祖母69歳の5人である。

家族の健康状態は、祖母が腰痛で足腰が弱い。他の家族員は、全員良好である。

夫は公務員、本人は保健婦で、年収は500～700万円未満の範囲にある。住居は、親世帯と別同居(玄関だけが共通)をして9年になる。母親の学歴は、短大卒業である。

- ・ネットワーク：第1円～夫、両方の両親、親友(職場のPersonal)、同僚(職場のMaternal)、職場の専門職の人。

第2円～友人(学生時代)、友人(夫と自分と共通)。

第3円～保育園、上司。

- ・生活の悩み：特になし。
- ・育児の悩み：子どもが1歳前後の時に、育児ノイローゼになった。

【一日の流れ】

26 ケースは、今回の調査でみられる、就労している母親の典型的な一日の生活を送っているといえる。夫の協力が増えてきているとは言われても、実際には、# 26 ケースのように帰宅が遅い夫が多く、新聞や育児エッセイでとりあげられるような、家事や育児を先頭だっしてくる夫は、調査協力者の家族にはいなかった。夫が協力してくれる内容としては、子どもの遊び相手や保育園のお迎えといった補助的なものに限られている。核家族の場合、朝は、8時頃の出勤時間へ向けて、朝食や子どもと自分の身支度を早々に済ませ、夕

方は、6時過ぎの帰宅後(途中、買い物をするケースも多い)から一気に夕食・後かたづけ・入浴というメニューをこなしていく。途中、子どもと一緒に過ごす時間や子どもが寝てからの時間が自分の余暇のための時間となるが、より積極的な余暇の時間を創り出すためには、祖父母(#30ケース)や帰宅が早いときの夫(#31ケース)に子どもを託して出かけるなどの周囲のサポートが必要となる。

祖父母と同居している場合の一日を#30ケースからみていくと、朝と夕方の慌たしさは変わらないが、出勤前と帰宅後に、それぞれ1時間程度、子どもを祖父母に預けることができるため、より家事を効率的にこなしている。その結果、朝も自分の趣味のために30分程度の時間をつくりだし、夜も、さほど夜更かしをせずに自分の時間を楽しんでいる。

【問題の解決】

資源が比較的恵まれている中で働いている母親の場合、生活上の悩みは、#26ケースで自分の家事の苦しさや夫の無協力への不満、#30ケースでは「何もない」という回答で、先の「資源に制約のあるケース」とは、同じ就労している母親でも、かなりの違いがみられる。特に#26ケースの場合は、夫の帰宅はいつも遅く、家事も一切しないことから、母子家族のように、この母親が一人で全てを担っているが、それでも生活の基盤が保障されているため、生活の悩みは「悩み」よりも「不満」的性格が強い。そうした不満や悩みは、職場や保育園での友人に話し、聞いてもらっている。子どもが熱を出したときや母親自身が寝込んだときなどの実体的なサポートを必要とする場合には、道内に住んでいる実母が来てくれている。働いている母親の場合、ネットワーク内の友人もまた、働いている場合が多く、友人どうしで子どもを預け合うことは難しい。#30ケースの場合も同様に、同居の祖父母が実体的なサポートを提供してくれていた。

これらのケースについて育児の悩みをみていくと、#26ケースでは、働いている母親であれば、

一度は悩むことがある「仕事と育児の両立の難しさ」である。保育園へ最初に預けて大泣きされたとき、熱はないが子どもの体調がすぐれないときなど、「なぜ、子どもをこれほど泣かしてまで、自分は働くのか?」と悩んだ。自分が仕事を続けることが、子どもに犠牲を強いているのかなあと落ち込むときも多かったという。けれども、職場へ来てしまえば、その気持ちを引きずっていることもなく、周囲の理解もあって、職場の友人と話したりして気分が持ち直す。そして、その持ち直した気分で帰宅できるという。この母親をはじめ、働いている母親にとっては、「働く」ということが悩みの原因の一つであると同時に、「仕事」という育児や子どもについての悩みを忘れることができる、一度冷却できる場所と時間が、解消の手だてともなっている。

#30ケースの育児の悩みは、Ch.1が1歳前後で意志表示ができて、自分の方は育児時間があけてフルタイムの就労になったときに、離乳食づくりに手が抜けず、イライラしている時期があった。子どもは子どもで、保育園から帰ってお腹がすいて、泣いてばかりいた。この時は、職場の友人から「どこかで手を抜くように……」というアドバイスをもらっていたが、手抜きをするということができず、夫にも八つ当たりしていた。結局、自分自身で「育児ノイローゼではないか?」と思って、精神科をたずね、医者のにじっくりと長いカウンセリングと精神安定剤をもらって解決した。他の育児上の小さな悩みは、ネットワーク上の様々な友人に、話をするだけで解決している。保健婦という仕事柄、職場に専門職も多く、聞ける人は多いという。そうした専門家やネットワークでの解決と同時に、この母親からあがってきていた要望は、育児をしている母親への社会的な対応である。育児時間にしても、1年間だけだと、ちょうど子どもにも変化がおきる時期とフルタイム就労への切り替え時期とが重なるので、育児時間の期間延長は強い要望としてあった。

4. 資源の制約と母親

(1) 資源の制約と母親のコーディネート

これまで、母親のもつ資源と母親のコーディネートの違いによって、母親たちの日常と問題解決を検討してきた。グループごとの特徴や個別のケース検討を通してわかったことは、コーディネートという、母親の個人的能力が問われる領域にあっても、資源が規定していることの可能性である。

まず最初に、専業主婦についてみれば、母親が主体者としてコーディネートできていないケースは、S I（専業主婦で世帯年収が500万円未満）グループの2ケースのみで、育児資源の多いS II（専業主婦で世帯年収が500万円以上）グループには、存在しなかった。データが少ないため、「育児資源が小さいために母親がコーディネートできていない」と結論づけることはできない。しかし、#4・#9ケースともに、祖父母世帯が、この家族を丸抱えしていることもあって、母親のネットワークに親族以外の広がりは見られない。その結果、ネットワークでの友人やネットワークを通じての情報によって、母親の「気づき」を起こさせる機会も閉ざされてしまっている。「育児資源が小さいために、母親としての問題が先送りされている」ということは、2ケースからでも示唆されるであろう。

では、コーディネートしている母親については、どうであろうか。コーディネートがうまくいっている母親としては、専業主婦ではS Iグループの#11・#24ケースとS IIグループでの#16・#23グループである。両者を比較してみると、どちらも時間を活用し、育児仲間や個人的なネットワークを広げ、そこでの問題解決を図っている点では共通している。しかし、母親の余暇の内容や解決される問題の中身については、違いがみられる。母親の余暇をとっても、S Iグループの方が専ら「在宅での余暇」を楽しむだけであるのに対して、S IIグループでは「在宅での余暇」も「積極的余暇」も楽しむ余裕がみられる。また、母親

のネットワーク間で解決される問題は、夫への不満や、育児の知識、そして「育児不安」といった精神的な悩みが多く、#11・#24ケースが抱えているような生活上の問題については、友人といえども、共感以上のものは提供できない場合が多い。公的な取り組みに沿っていえば、育児の電話相談サービスで解決できるような「悩み」については、母親のもつネットワークや母親が収集した情報によって解決はできるが、生活基盤の問題に関わってくる施設の利用や児童手当に相当するような生活の保障に関する悩みを、個人間のネットワークで支えあうには限界がある。こうした母親の積極的余暇のための時間と費用の捻出や生活の問題解決は、母親が限られた資源をコーディネートすることで、どこまで実現できるのであろうか。

このことは、就労している母親についても言えることであり、P Iグループ（パートタイム就労で世帯年収が500万円未満）の#15・#17・#19ケースとFグループ（フルタイム就労で世帯年収は500万円以上）の#26・#30ケースを比較した場合、個々の母親がそれぞれに抱える「育児の悩み」については、両者ともに解決してきているが、#15・#17・#19ケースが抱えている「生活の悩み」については、生活のリスクとして背負ったままである。専業主婦の場合であっても、就労している母の場合であっても、どれだけ母親のコーディネートの能力が優れていたとしても、家族や母親のもつ資源の制約によって、その能力にも限界があることが改めて確認できた。

こうした生活の問題や生活の状態を育児の問題とは切り離して、育児の悩みとそこから見える問題だけを論じていくことも可能であるし、実際に、それらは分断して考察される場合が多い。しかし、#4ケースや#9ケースのように、子どもとの関わりがないために育児問題が顕在化しない場合や、#17ケースのいう「生活が落ち着くまで子どもへと目が行かなかったこと」や、#19ケースのいう「経済的に大変なことは生活の全てに影響する。精神的にも影響する。」といった状態は、育児の問題としては取り上げられなくても、育児され

ている子どものへの影響は少なくない。生活の問題は育児の問題へと根本的に関わっているものであるが、いまだ育児の社会化が進んでおらず、その責任が家族に、なかでも母親に集中している現状にあっては、生活問題が「母親の頑張り」というベールの中に隠れてしまい、「育児問題」として表れる部分だけが問題とされがちである。

(2) 育児困難と「育児不安」

これまで、母親とその家族がおかれている社会的な階層によって、母親が操れる資源が一定部分規定され、それは母親の優れたコーディネート能力をもっても限界があることをみてきた。最後に、そうした母親の生活条件とコーディネートの仕方によって、育児に関する母親の意識がどのように違うのか、その時の「育児不安」とは母親全体にとって、どのような位置にあるのかを考えていきたい。

先のケース検討の中で、「育児不安」が高いと訴えていたケースは、S IIグループでの# 14・# 15 ケースであった。これらのケースに共通していることは、子どもに特別の問題を抱えていなくとも母親の不安感が存在しているということ、また、母親は子どものために何もしていないのではなく、懸命にコーディネイトしていることがあげられる。# 14 ケースの母親でいえば、子どもが1歳前後の頃から、子どもの言葉の遅れに対しての「大丈夫」を得るために様々な機関を訪問している。さらに、プールや体操の習い事にしても、「子どもが人の中が苦手なので、その苦手感に対して慣れさせるため」と、「男の子としては体も小さくかぜもひきやすいので体力づくりのため」と考え、習わせるまでも先輩の母親や地域雑誌からの情報を入手して検討している。# 18 ケースにしても、3人の子どもの育てる大変さの中で、自分ための時間を犠牲にしても、それぞれの子どもを複数の習い事へ通わせて、その付き添いをしている。「子どものため」のコーディネートのしすぎが、「育児不安」を高めているという、皮肉な結果となっている。これが、F（フルタイム就業）グループの# 26 ケースのように、仕事という子どもや育児を

忘れられる時間と場所をもてれば、高まった「育児不安」も客観視できるのであるだろうが、そうした機会は、単に専業主婦をしているだけでは見だしにくい。さらに「育児不安」とコーディネートの関係は、同じ社会階層のグループに位置しながらも、生活全般に充実している# 16・# 23 ケースと、「育児不安」が高くなってしまいうケースとの違いからもいえる。前者が「自分」と「子ども」の両者を捉えているのに対し、後者は「子どもだけ」を捉えていた。この違いは、単に「母親の性格特性」の違いであるとみることもできる。しかし、# 14 ケースの「人並み」という発言や# 18 ケースの「マスコミでの親子のモデル」の発言にあるように、「育児不安」が高いケースは、常に他児・他者との比較によって、育児の方向性を決定してきたとも考えられる。このことは、2節における母親の意識にも表れていたように、母親の外にあって「育児不安」を誘発する要因であり、他の調査においても示唆されている⁽²⁰⁾。どの母親であっても、そのトラップに入ってしまうと、「育児不安」が増大していく可能性は存在している。さらに、こうした比較から生じる「育児不安」に対しては、これらの世帯の経済的余裕も後押しする形で、商業的なサービスを購入すること（他者との差異）によって解決がとられがちとなる⁽²¹⁾。今回の# 18 ケースは、まさに数々の「習い事」によって、その不安を払拭しようとしていた。

ここで、これまでみてきた「育児不安」や育児困難について、社会的階層全体の中で位置づけてみたい。2節でみてきた母親たちの「育児の悩み」は、どのグループの母親にも存在していた（表1参照）。そしてその内容は、子どもの状態や家族の状態によって様々ではあったが、子どもを育てている母親であれば誰しもが抱く悩みとして、健康な範囲の育児の悩みや育児不安であるといえる⁽²²⁾。しかしこれに、資源によって規定されやすい生活問題を掛け合わせることによって、「育児不安」を含めた育児困難が、一定の階層的差異を帯びてくる。すなわち、生活問題が生じる「生活基盤」の有りようによって、「育児不安」だけのレベ

ル、生活の困難さによって生じる「育児不安」のレベル、そして「育児不安」としては表れないが育児の困難さとして生じているレベルというように、「育児不安」の表れ方も異なってくる。今回の事例をあてはめてみれば、生活問題はなくとも「育児不安」が強く表れていたのがS IIグループの# 14 ケースや# 18 ケースであり、「育児不安」としては感じないわけではないが、生活問題の解決が先立って「育児不安」が相対的に弱くなっていたのがS Iグループの# 11・# 24 ケースやP Iグループの# 15・# 17・# 19 ケースである。また、S Iグループの# 4 ケースや# 9 ケースは、育児困難は存在していても「育児不安」としては表れてきていない。

「育児不安」を、母親が位置する二つの資源と母親のコーディネートの違いで示していくと、育児の悩みにも近い広義の育児不安は、現代家族の育児構造⁽²³⁾ の中では、どの階層の母親にも広く存在しうる。その意味で広義の育児不安とは、現代社会では、誰もが気楽に子育てをし難い、ということの反映であるにすぎないと考えられる。そうした共通の特性の上で、さらに「育児不安」として⁽²⁴⁾ 強く表れるのは、構造的資源も編成的資源も豊富な中で、広義の育児不安に敏感に反応し、子どものために様々なコーディネートをしていく母親であり、それは育児の熱心さと裏表の関係にある。同様の資源とコーディネート能力をもちながら、充実している母親たちというのは、広義の育児不安に反応しつつも、「育児不安」として問題視せず、単に育児不安の一つとして相対化することができたからであろう。また、母親自らが「育児不安」が高いと言っていた# 14 ケースや# 18 ケースの母親でさえ、医師などの専門家のケアを必要としたり、虐待の予防としての介入を必要とするような範囲のものではない。単に「育児不安」として強く表れる母親を、子どもへの虐待のシグナルとしてみていくには、距離があるように思われる。広く育児困難の問題に対して、「育児不安」という看板だけを大きくして注目していくことは、母親たちを（育児産業も後押しする形で）広義の

育児不安の中から「育児不安」へと駆り立てていく⁽²⁵⁾ にすぎないのではないだろうか。しかし、その一方で、# 4・# 9 ケースのように、「育児不安」としては表れていない母親にも、育児の困難さは存在している。彼女たちは、構造的資源も編成的資源も小さく、「育児不安」はもとより、広義の育児不安も意識の上に上がってきておらず、問題解決も放棄されたままとなっていた。生活基盤の弱い家族が潜在化するように、こうした育児の困難さは、虐待や放任といったドラスティックな形で表れるまでは、顕在化しにくい傾向がある。

こうしてみると、育児困難を抱えた母親に対しても、二通りのケアが考えられるであろう。「育児不安」に対してのケアが必要な場合には、軽いものでは友人どうしのネットワーク形成を促したり、深刻なケースでは専門家のセラピーを受けるといった、編成的な資源の組み替えをすることで解決をはかっていくといったアプローチが考えられる。生活問題と重なった育児困難のケースに対しては、編成的資源の組み替えに加えて、構造的資源を強化するといったアプローチが必要となる。実際の育児・子育て支援のプログラムをみるかぎり、「育児不安」に対する育児支援に比べて、生活基盤に関わる育児支援や育児保障については、児童扶養手当の削減への動きなど、後退する様相が強い。「育児不安」だけに限らず、育児困難全体へのアプローチの重要性は、低所得家族や母子家族だけへのケアに終わらず、ひいては子どもを育てている親全体の生活条件を底辺から保障することに他ならない。

注・引用文献

- (1) 岩田美香「「育児不安」研究の限界——現代の育児構造と母親の位置——」『教育福祉研究』第3号、1997年。
- (2) 「構造的資源 (Structural Resources)」と「編成的資源 (Organizing Resources)」とは、Sandra Wallman によって提出された資源のシステム理論である。彼女は、社会的弱者も、よりよい資源を求めて自分たちのおかれた状況を改善する力をもつ

ているという前提に立ち、様々なカテゴリーに属する都市の住民が、どのような資源の選択を行い、また、制約を受けているのかを明らかにした。その際、従来の経済的資源モデルである土地（住宅）・労働（サービス）・資本（商品とお金）という構造的（ハード）な資源に加えて、時間・情報・アイデンティティの3つを生活のソフト面にあたる編成的資源として導入した。なお本稿では、編成的資源として時間・情報・ネットワークを用いた。

Sandra Wallman (1984) *Eight London Household*. Tavistock Publications Ltd., London. (福井正子 訳『家庭の3つの資源』河出書房、1996年)

- (3) 山田は、従来のいくら家計収入があるといった「生産」の視点から見た階層でもなく、いくら使っているかという単なる「消費」の視点からでもない、「再生産」という視点を考慮に入れた家族の階層を細かく読み解く必要性を説いている。

山田昌弘『近代家族のゆくえ』新曜社、1994年。

- (4) 山田は、ブルデューが分析したような、夫の職業階層によって近似される「文化階層」や「経済階層」での社会階層に加えて、近代家族の原則下では、家族の中に世話が必要な「弱者」の存在とその状況とが、家族の生活水準を決定する要因であるとしている。

山田、前掲書、1994年。

- (5) 共働きの妻（週35時間以上勤務）の仕事の平均時間は、7時間4分である。小野瀬裕子「共働き夫婦の家事と子育て」湯沢雍彦 編 NHK ブックス『図説 家族問題の現在』日本放送出版協会、1995年。
- (6) Kahn & Antonicci のコンボイ (convoy) 概念とは、Bowlby の愛着理論をもとにし、それを個人の一生を通じての対人相互作用にまで拡張したものである。ライフ・コースを通じて変化するソーシャル・サポート・ネットワークを「個人の援護隊（コンボイ）」と呼び、個人を中心にした同心円構造としてモデル化している。

また、その第1円に属するメンバーは、「様々な状況で支えを提供することができる」としている。」

Kahn, R.L. & Antonicci, T.C. (1980) *Convoys over the Life Course: Attachment, Roles, and*

Social Support. LIFE-SPAN DEVELOPMENT AND BEHAVIOR, VOL.3. (遠藤利彦 訳「生涯にわたる「コンボイ」愛着・役割・社会的支え」東洋・柏木恵子・高橋恵子（編集・監訳）『生涯発達の心理学 2巻 気質・自己・パーソナリティ』新曜社、1993年。)

- (7) Personal ネットワーク・Maternal ネットワークとは、Jennings, Stagg, and Connors の分類を参考にしたものである。Personal ネットワークとは、母親の学生時代や元あるいは現在の職場の友人など、母親役割に関係なくできたネットワークのことであり、Maternal ネットワークとは、産院や母親学級で知り合ったり、子どもの幼稚園・学校を通して知り合ったというように、母親としての立場を通してできたネットワークのことであり、同様に、それぞれのネットワークでの友人を Personal 友人、Maternal 友人と用いる。

Jennings, Stagg, and Connors (1991) *Social Networks and Mothers' Interactions with Their Preschool Children CHILD DEVELOPMENT, 62.*

- (8) 兵庫県家族問題研究所「核家族の育児援助に関する調査研究報告書」1987年。
- (9) 母親の妊娠期から子どもが3歳児まで、母親の様々な悩みの相談相手を訪ねたところ、夫や家族・親族が上位を占め、また、いくつかの場面を設定して「子どもの預け先」をたずねても、同様の結果が見られた。

岩田美香「育児期の母親の心理および生活とソーシャル・ネットワークの活用」北海道大学教育学部修士論文、1994年。

岩田美香「育児期の母親の不安とソーシャル・ネットワーク」『北海道大学教育学部紀要』第68号、1995年。

- (10) 3歳児をもつ母親に同様のネットワーク調査をした結果、育児上の問題を解決せずに先送りしていた母親たちのネットワークとして、第1円が家族・親族で占められているという特徴があった。また、母親のネットワークの中から、サポーターとストレッサーになる人をあげてもらったところ、家族・

親族がサポーターであると同時にストレスラーとしても高率であげられていた。

岩田美香、前掲書、1994年および1995年。

- (11) 母子家族に対する調査において、母親の悩みの相談相手は親族のみで占められる場合が多かったが、そこでも母親の年齢が高くなるとともに相談できる親族も減り、あるいは親族であるからこそ相談できない悩みが生じた場合などには、「誰にも相談しない」という結果が生じてしまうというリスクも考えられる。

岩田美香「母子家庭の分析」杉村宏・岩田美香『単親（父子・母子）家庭生活実態調査報告書』北海道民生委員児童委員連盟、1996年。

岩田美香「ひとり親家族の生活と社会関係——全道と札幌市における生別による母親の検討から——」『北海道社会福祉研究』第18号、1998年。

- (12) 岩田美香、前掲書、1994年および1995年。

牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭生活研究所紀要』第3号、1982年。

牧野カツコ「働く母親と育児不安」『家庭生活研究所紀要』第4号、1983年。

牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭教育研究所紀要』第9号、1987年。

- (13) 育児の悩みに続いて生活の悩みをたずねたことから、多くの母親が両者を区分して回答してくれたが、もちろん、育児の悩みと生活の悩みとは、常に分けて生じるものではなく、お互いに影響し合って生じてくる場合も少なくない。表1では、生活の悩みの答の中に育児の悩みと思われる回答もあるが、母親が「育児の悩み」・「生活の悩み」のそれぞれの質問において回答してくれた領域のまま載せてある。

- (14) 岩田美香、前掲書、1996年および1998年。

- (15) この質問は、1972～1975年にかけて行われた「日米幼児教育研究」において考案・使用されたものである。

東洋・柏木恵子・R.D. Hess『母親の態度・行動と子どもの知的発達——日米比較研究』東京大学出版界、1981年。

- (16) 岩田美香「縦断調査からみた「育児不安」の性格」『北海道大学教育学部紀要』第74号、1997年。

- (17) 総務庁の「社会生活基本調査」では、「在宅型余暇」をテレビ・ラジオ・新聞・雑誌および休養・くつろぎの合計とし、「積極型余暇」を学習・研究、趣味・娯楽、スポーツおよび社会的活動の合計、「交際・付き合い」、「その他」としている。その分類のもと、専業主婦の余暇時間は、「在宅型余暇」で3時間46分、「積極型余暇」で1時間、「交際・付き合い」が30分となっている。

総務庁統計局『平成3年 生活基本調査報告 第10巻』、1993年。

- (18) 『生活保護手帳（平成9年度版）』全国社会福祉協議会、1997年。

- (19) 「あそびのひろば」とは、平成9年度から札幌市が行っている公的な幼児の集団活動の場である。札幌市内に住む1歳半～就学前の子どもと母親を対象とし、地域での育児サークル、仲間づくりを目的として、母子ともに参加する活動のことである。このプログラムの前身は昭和35年よりはじめられた「仲良し子ども館」であった。両者の違いは、「仲良し子ども館」が幼児の健康づくりや地域での仲間づくり、親子遊びの指導などを目的としているのに対して、「遊びの広場」では、より母親たちが主体となって育児サークルを結成していくことに重点が置かれている。また、「仲良し子ども館」が、1年間を通したプログラムであるのに対して、「遊びの広場」は1年間を4期に分け、年に4回の募集を行っている。

- (20) 3歳児の時点と小学校入学時との縦断調査から、社会的に孤立し育児の責任を感じている母親が、「他児との比較」と「情報・育児産業」との間を「育児の標準（スタンダード）」を求めていく中で、「育児不安」が増大していく、という過程を仮説的に組み立てた。

岩田美香、前掲書、1997年。

- (21) 山田は、子どもにとって望ましいことや必要なことが、マーケティングの戦略から次々と提案されて、母親が子どものためにそれらの何かしなければ愛情がないという圧力が、「母性愛」と関わって展開

されることから、母親の感情マネージの水準が上昇していく様を示している。

山田、前掲書、1994年。

- (22) 本村他や岩田は、子どもを育てている母親であれば誰しも「育児不安」をもっており、「育児不安」があることが問題なのではなく、「育児不安」が病的に高い場合や、育児の問題があるにもかかわらず、顕在化されない場合の問題性を指摘してきた。

本村汎・磯田朋子・内田昌江「育児不安の社会学的考察——援助システムの確率に向けて——」『大阪市立大学生生活科学部紀要』第33巻、1985年。

岩田美香、前掲書、1995年、1997年。

- (23) 現代家族は、育児役割が核家族に独占・集中されるという単純な育児構造にあり、家族外部の諸主体の育児作用は、親によるスクリーニングを経て、子どもに達することとなる。その結果、親が家族外部の育児資源・育児機会に、いかにアクセス・コントロールするかによって、子どもの育児構造が規定されるとしている。

渡邊秀樹「現代の親子関係の社会学的分析——育児社会論序説」社会保障研究所編『現代家族と社会保障』、1994年。

- (24) 牧野による一連の研究によって代表される「育児不安」研究や、著者自身の研究（1994、1995）においても、また、育児雑誌等で取り上げられる「育児

不安」特集にしても、広義の育児不安の中から、比較的資源の豊富な母親に強く表れやすい「育児不安」を問題視し、注目していたにすぎなかったのではないだろうか。

牧野カツ子、前掲書、1982年・1983年および1987年。

牧野カツ子「育児における〈不安〉について」『家庭教育研究所紀要』第2号、1981年。

牧野カツ子・中西雪男「乳幼児を持つ母親の育児不安——父親の生活および意識との関連」『家庭教育研究所紀要』第6号、1985年。

牧野カツ子「〈育児不安〉の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』第10号、1988年。

岩田美香、前掲書、1994年および1995年。

- (25) 上野は、「言説の方が問題を作り上げていく」という仮説に基づき、現代の児童虐待問題の取り上げ方を指摘し、児童虐待問題「論」を展開している。

上野加代子『児童虐待の社会学』世界思想社、1996年。

今日の「育児不安」問題についても、「言説が問題を作り上げていく」という側面がみられるのではないだろうか。

(岩田美香・北海道大学教育学研究科博士後期課程)